

第 2 章

統計データでみる福島県経済

第2章 統計データでみる福島県経済

1 個人消費

(1) 百貨店・スーパー販売額

令和5年の百貨店・スーパー販売額は、全店舗ベースで総額2,858億34百万円、前年比2.1%増となり、2年連続で前年を上回った。既存店ベースの前年比は1.1%増となり、3年振りに前年を上回った(図2-1-1)。

1年間の推移をみると、百貨店・スーパー販売額は2月以外の各月で前年同月を上回った(図2-1-2)。

商品別販売額をみると、「飲食料品」は物価高などの影響もあり、2月を除く全ての月で前年同月を上回った。

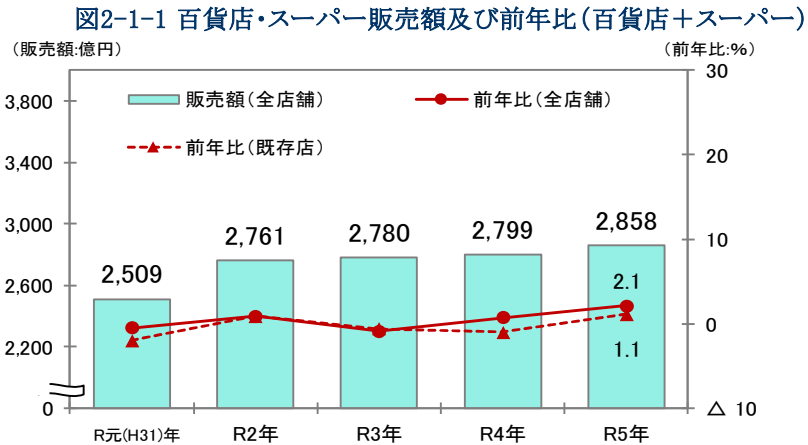
一方で、「家具・家電・家庭用品」と「身の回り品」は買い換え需要の一巡の影響などにより年間を通して低調な動きとなり、ほとんどの月で前年同月を下回った(図2-1-3)。

【百貨店・スーパー販売額(旧大型小売店販売額)】

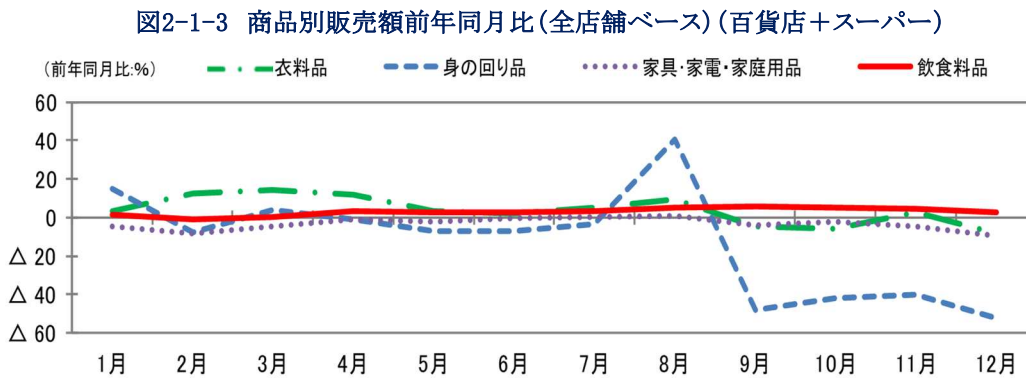
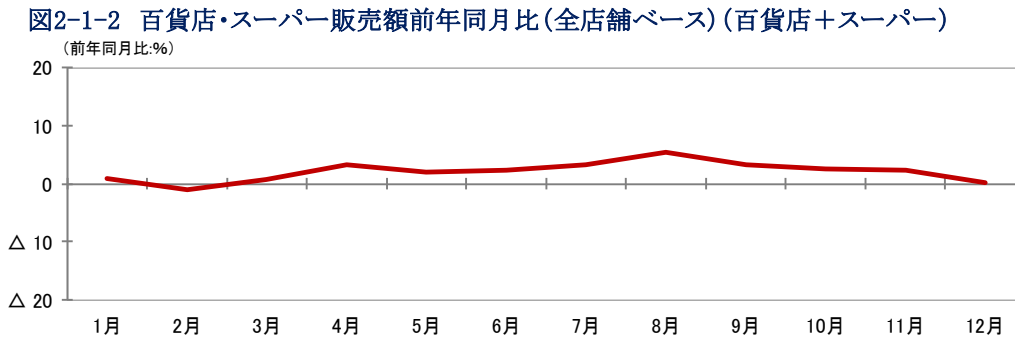
調査対象となる百貨店2店とスーパー119店(令和5年12月末現在)の総販売金額です。既存店ベースの前年同月比とは、前年同月も調査の対象であった店舗のみを比較するものです。過去1年間に開・廃業した店舗の販売額は除かれているので、前年と同一条件で消費動向をみることができます。

なお、令和2年3月分から、調査対象事業所の見直しを行ったため、令和2年2月以前の月間販売額などとの間に不連続が生じています。なお、前年(同期・同月)比は、ギャップ調整のためリンク係数で処理した数値で計算しています。

百貨店・スーパー販売額(年次)の推移



百貨店・スーパー販売額(月次)の推移



備考1 (資料:経済産業省「商業動態統計」より作成。)

【指標は P.60~P.62 に掲載】

(2) コンビニエンスストア販売額

令和5年のコンビニエンスストア販売額は、総額約2,097億41百万円、前年比1.7%増となり2年連続で前年を上回った(図2-1-4)。

1年間の推移をみると、新型コロナの5類移行による人流回復や、単価上昇による価格要因の影響などにより、全ての月で前年を上回った(図2-1-5)。

【コンビニエンスストア販売額】

商業動態統計の業態別販売額では、百貨店・スーパー販売額に次ぐ規模であり、消費者に身近な店舗として存在感を増しています。平成27年7月分から都道府県別に販売額が公表となりました。

(3) 専門量販店販売額

令和5年の専門量販店販売額は、総額約2,409億41百万円、前年比1.5%増となり、9年連続で前年を上回った。

業態別にみると、家電大型専門店販売額は、総額約475億40百万円、前年比4.6%減となり3年連続で前年を下回った。

ドラッグストア販売額は、総額約1,240億83百万円、前年比7.4%増となり、9年連続で前年を上回った。

ホームセンター販売額は、総額約693億18百万円、前年比3.7%減となり3年連続で前年を下回った(図2-1-6、図2-1-7)。

1年間の推移をみると、巣ごもり需要の反動などにより、家電大型専門店では8月以外の全ての月で、ホームセンターは11月以外の全ての月で前年を下回った。ドラッグストアは全ての月で前年を上回った。(図2-1-8)。

【専門量販店販売額】

家電大型専門店、ドラッグストア、ホームセンター販売額は、商業動態統計において、平成26年1月分から「専門量販店販売統計」として開始された統計です。家電大型専門店は比較的高額な耐久財を扱っていたり、ドラッグストアやホームセンターは家庭用品や日用雑貨等多品目を扱っていたりと消費者の生活にあわせた商品を販売しているため、消費動向をみるうえで注目される指標となってきています。

コンビニエンスストア販売額(年次)の推移

図2-1-4 コンビニエンスストア販売額及び前年比

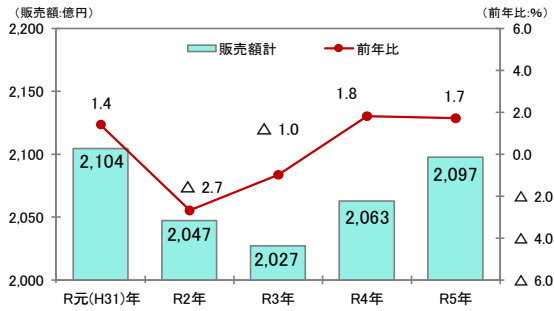
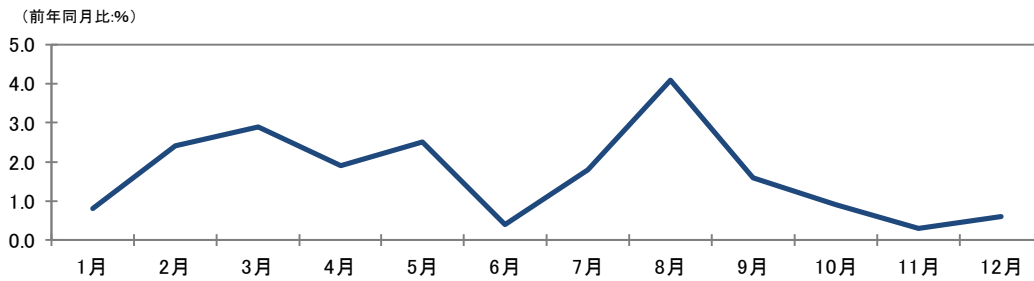


図2-1-5 コンビニエンスストア販売額前年同月比



専門量販店販売額の推移

図2-1-6 専門量販店販売額

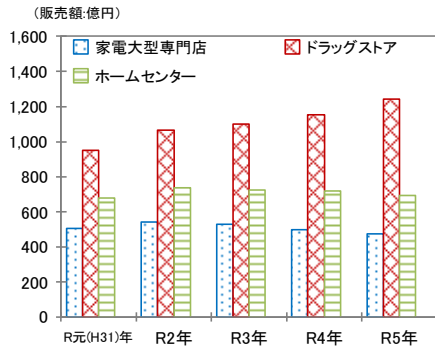


図2-1-7 専門量販店販売額前年比

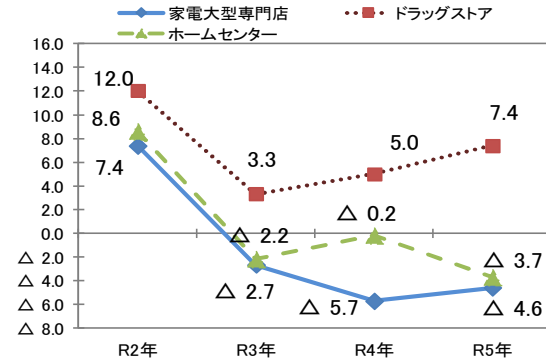
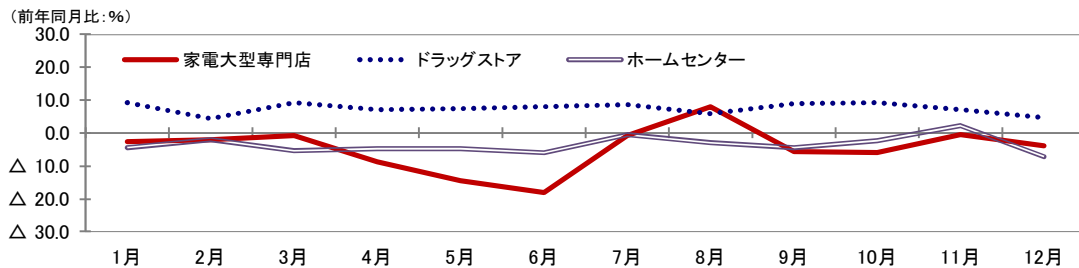


図2-1-8 専門量販店販売額前年同月比



備考1 (資料:経済産業省「商業動態統計」より作成。)

【指標は P.63 に掲載】

(4) 乗用車新規登録台数

令和5年の乗用車新規登録台数は60,987台、前年比15.5%増となり、4年振りに前年を上回った(図2-1-9、図2-1-10)。

車種別の登録台数と、前年比への寄与度をみると、普通自動車(3ナンバー)は24,508台(寄与度11.8%)、小型自動車(5ナンバー)は14,605台(同1.5%)、軽自動車(660cc以下)は21,874台(同2.1%)となり、全車種が上昇に寄与した(図2-1-9、図2-1-10)。

車種別の登録台数占有率をみると、普通自動車(40.2%)は前年から拡大し、軽自動車(35.9%)及び小型自動車(23.9%)は前年から縮小した(図2-1-11)。

1年間の推移をみると、新型コロナウイルス感染症などによる影響で供給不足が続いていた半導体の供給が回復し、全ての月において前年を上回った(図2-1-12)。

【乗用車新規登録台数】

乗用車の購入により、運輸支局及び軽自動車検査協会に登録された台数です。耐久消費財の販売動向を消費側からとらえた統計です。自動車を購入した際には必ず登録をするため網羅性があり、速報性もあります。3月や9月の決算期には台数が多くなるなど、顕著な季節性があります。

乗用車新規登録台数(年次)の推移

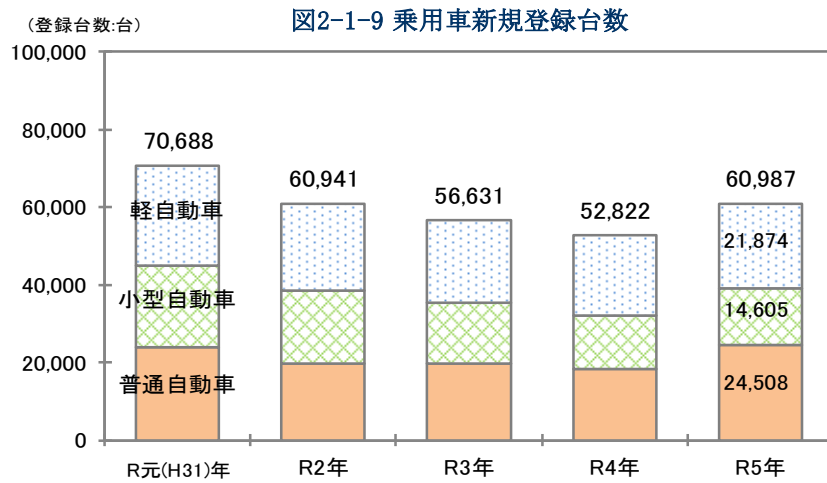


図2-1-10 乗用車新規登録台数前年比及び車種別寄与度

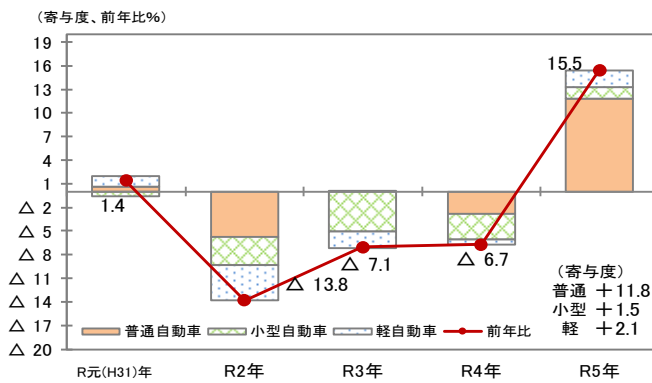
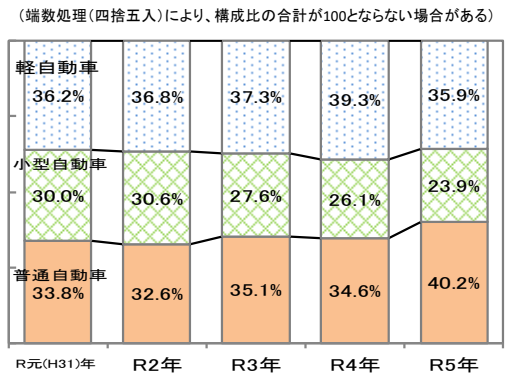
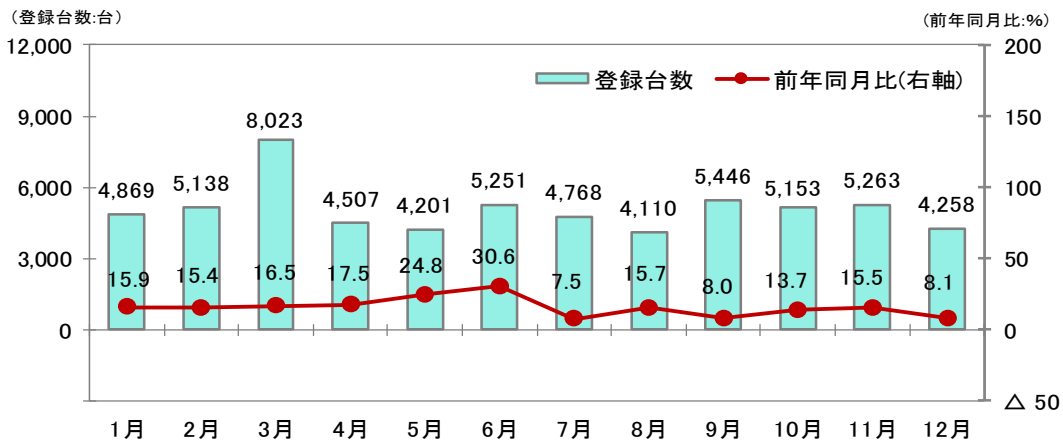


図2-1-11 年別車種別登録台数占有率



乗用車新規登録台数(月次)の推移

図2-1-12 乗用車新規登録台数及び前年同月比



備考1 (資料:東北運輸局、全国軽自動車販売協会より作成。)

【指標はP.64に掲載】

2 建設需要

(1) 新設住宅着工戸数

令和5年の新設住宅着工戸数は8,444戸、前年比9.5%減となり、7年連続で前年を下回った(図2-2-1、図2-2-2)。

種類別の戸数と、前年比への寄与度をみると、持家は4,089戸(寄与度 Δ 5.6%)、貸家は2,488戸(同0.8%)、給与住宅は11戸(同 Δ 1.7%)、分譲住宅は1,856戸(同 Δ 3.0%)となり、持家、給与住宅、分譲住宅が下降に寄与した。(図2-2-1、図2-2-2)。

1年間の推移をみると、1月から4月、6月、7月、9月、10月、12月は前年を下回った。

(図2-2-3)。

【新設住宅着工戸数】

家やマンションを建てる時に、建築主から都道府県知事にその旨を届けた戸数を集計したもので、住宅投資の動きを示す代表的な指標です。進捗ベースではなく、着工ベースの指標のため速報性があります。所得・地価・建築費・金利などに敏感に反応して動きます。また、政府の景気対策で「住宅ローン減税」のような政策の影響も受けます。

新設住宅着工戸数の推移

図2-2-1 新設住宅年次着工戸数

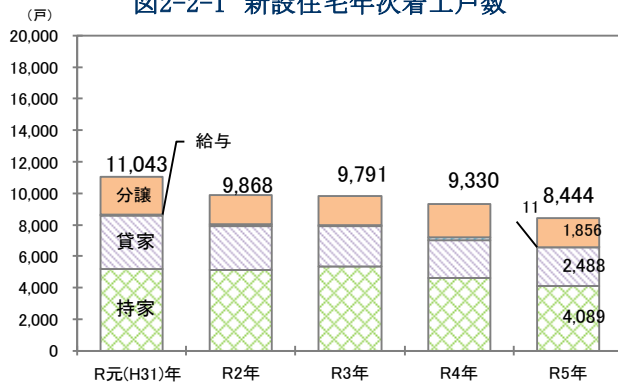
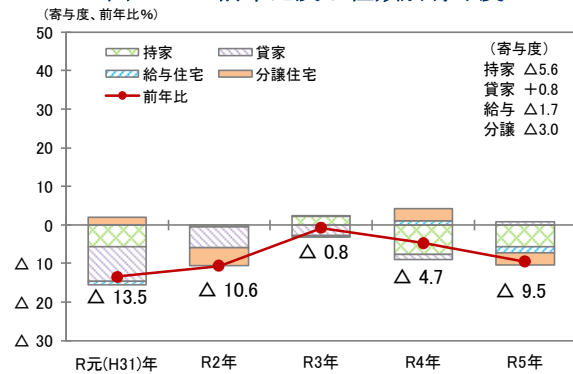
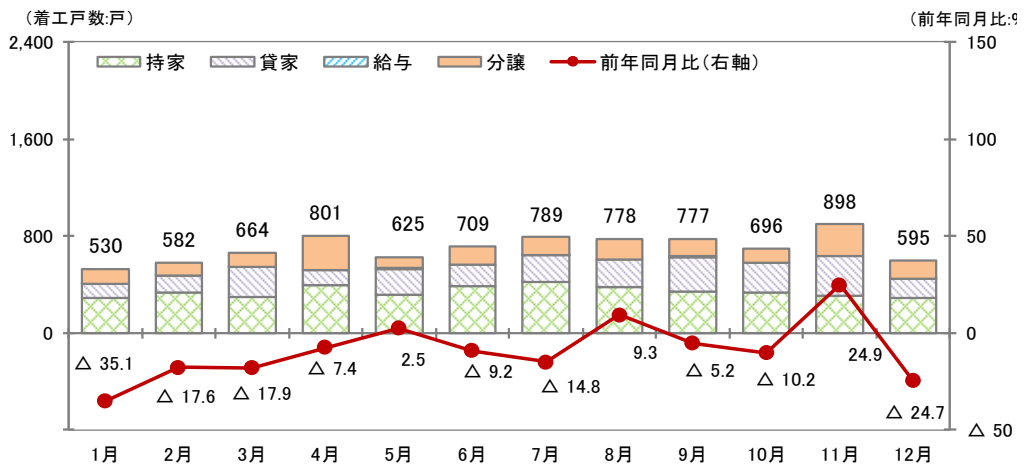


図2-2-2 前年比及び種類別寄与度



備考1 (資料:国土交通省「住宅着工統計」より作成。)

図2-2-3 新設住宅月次着工戸数及び前年同月比



【指標は P.64~P.66に掲載】

(2) 公共工事請負金額

令和5年の公共工事請負金額は4,440億円、前年比2.9%減となり、3年連続で前年を下回った(図2-2-6、図2-2-7)。

1年間の推移をみると、4月及び6月から11月で前年を下回った(図2-2-8)。

【発注者別の請負金額及び寄与度】

◆国の機関(国・独立行政法人等)は、1,585億円(寄与度△3.6%)となった(図2-2-6、図2-2-7)。

国は1,200億円(同△3.8%)となり、前年を下回った。

独立行政法人等は385億円(同0.2%)となり、前年を上回った。

◆地方の機関(県・市町村・地方公社等)は、2,855億円(寄与度0.7%)となった(図2-2-6、図2-2-7)。

県は1,471億円(同3.2%)となり、前年を上回った。

市町村は1,313億円(同△1.6%)となり、前年を下回った。

地方公社・その他が71億円(同△0.9%)となり、前年を下回った。

【公共工事請負額】

国、地方公共団体、独立行政法人等が発注した公共工事のうち、保証事業会社の保証による公共工事について、保証事業会社が請負金額を取りまとめて集計したもので、発注者ごとに分かれます。

公共工事請負金額(年次)の推移

図2-2-6 公共工事請負金額(発注者別)
(請負金額:億円)

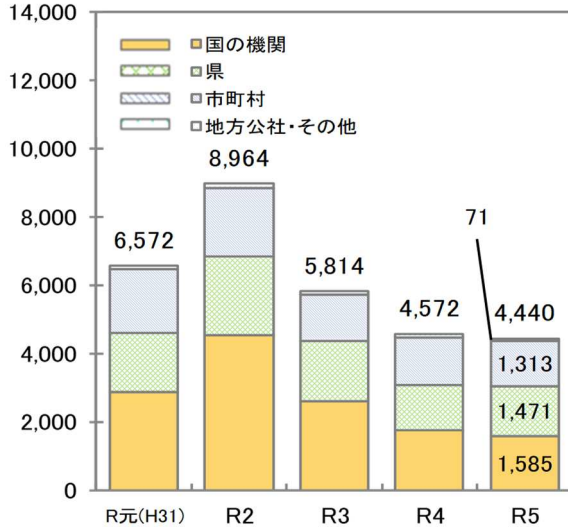
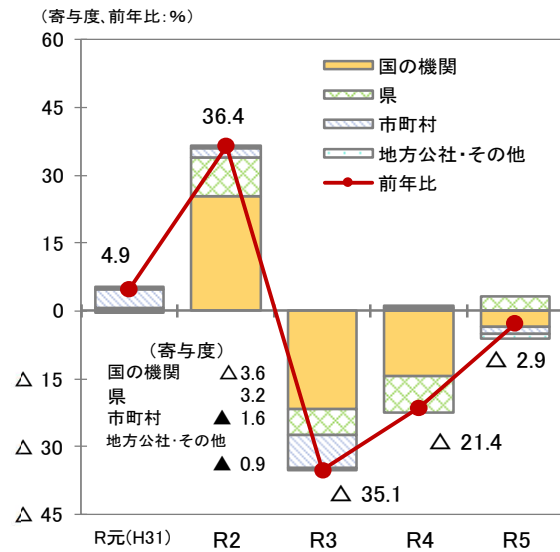


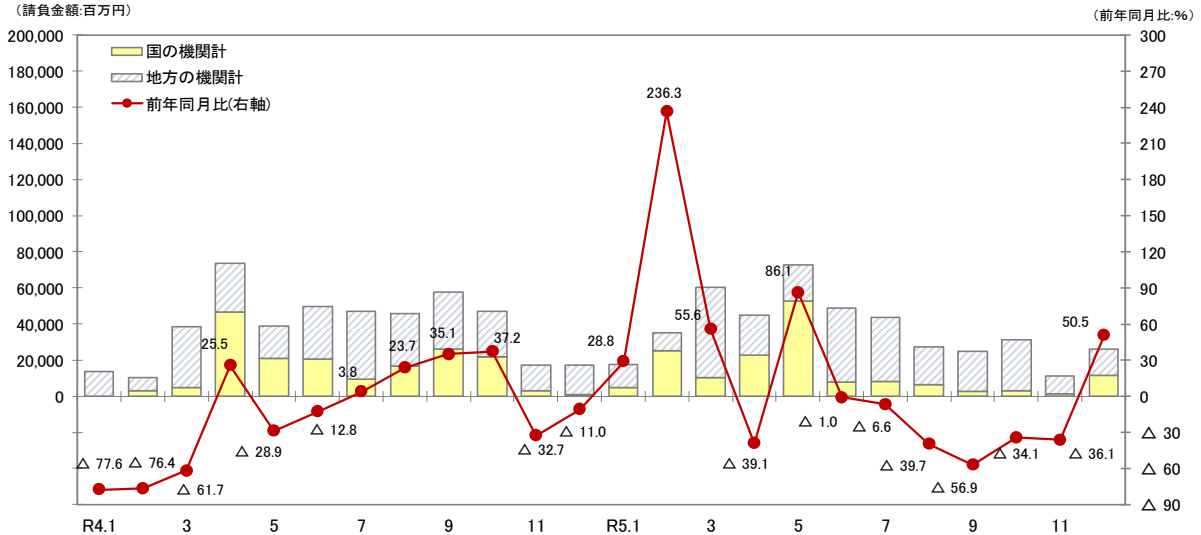
図2-2-7 前年比及び発注者別寄与度



備考1 (資料:東日本建設業保証株式会社「公共工事前払金保証統計」より作成。)

公共工事請負金額(月次)の推移

図2-2-8 公共工事請負金額(発注者別)及び前年同月比



備考1 (資料:東日本建設業保証株式会社「公共工事前払金保証統計」より作成。)

【指標はP.67に掲載】

(3) 業務用建築物着工工事費

令和5年の業務用建築物着工工事費は1,483億49百万円、前年比5.7%増となり、2年連続で前年を上回った。(図2-2-9)。

1年間の推移をみると、2月、5月、8月、11月、12月で前年を上回った。(図2-2-11)。

業種別の着工工事費をみると、「製造業」が最も多く649億50百万円、次いで「卸売業・小売業」が144億88百万円、「医療・福祉」が139億77百万円となった(図2-2-12)。

なお、業務用建築物着工延床面積は550千㎡、前年比3.4%減となった(図2-2-10)。

【業務用建築物着工工事費】

建築主が建築物を建築しようとする場合は、その旨を都道府県知事に届けなければならない。この届出をもとに集計したものが建築物着工統計です。進捗ベースではなく、着工ベースの指標のため速報性があります。「業務用」とは、全建築物から居住専用と居住産業併用を除いたもので、企業の設備投資を反映します。

業務用建築物着工工事費(年次)の推移

図2-2-9 業務用建築物着工工事費及び前年比

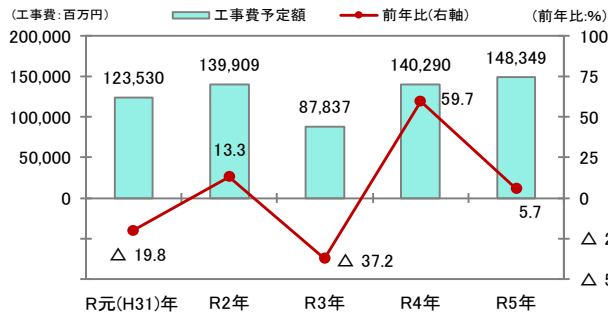
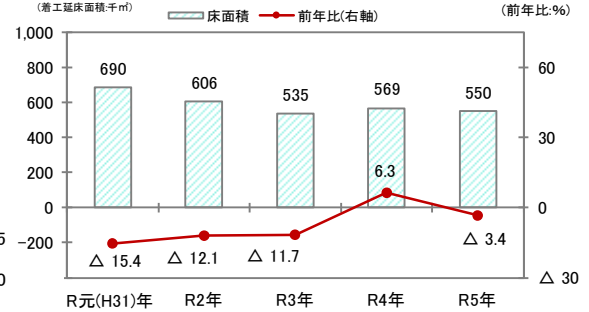


図2-2-10 業務用建築物着工延床面積及び前年比



業務用建築物着工工事費(月次)の推移及び業種別着工工事費

図2-2-11 業務用建築物着工工事費及び前年同月比

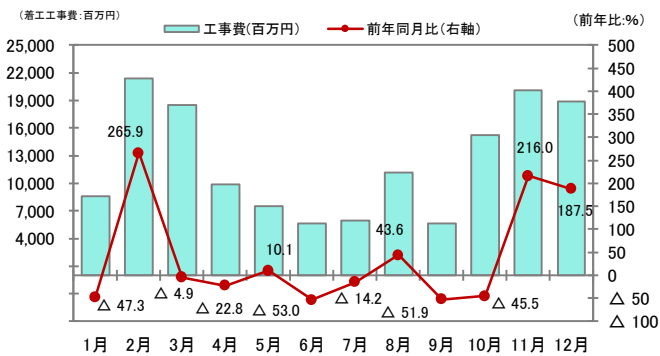
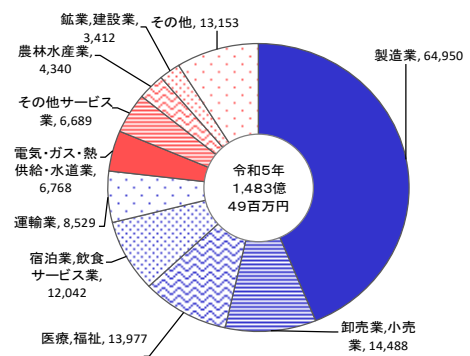


図2-2-12 業種別業務用建築物着工工事費



備考1 (資料:国土交通省「建築着工統計」より作成。)

【指標は P.67に掲載】

3 生産活動

(1) 鉱工業指数(総合)

令和5年の鉱工業生産指数(原指数)は103.8、前年比0.3%減となり、3年振りに前年を下回った(図2-3-1、図2-3-2)。

生産指数(季節調整値)の1年間の推移をみると、95.7となった11月を除き、101台前半から106台前半で推移した(図2-3-3、図2-3-4)。

業種別寄与度(原指数)をみると、電子部品・デバイス工業などが下降に寄与したものの、輸送機械工業などが上昇に寄与し、総合で前年を下回った(図2-3-5)。

令和5年の鉱工業出荷指数(原指数)は109.0、前年比1.3%増となり、3年連続で前年を上回った(図2-3-1、図2-3-2)。

出荷指数(季節調整値)の1年間の推移をみると、104台前半から113台前半で推移した(図2-3-3、図2-3-4)。

業種別寄与度をみると、電子部品・デバイス工業などが下降に寄与したものの、輸送機械工業などが上昇に寄与し、総合で前年を上回った(図2-3-6)。

令和5年の鉱工業在庫指数(原指数)は128.8、前年比20.1%増となり、2年連続で前年を上回った(図2-3-1、図2-3-2)。

在庫指数(季節調整値)の1年間の推移をみると、120台前半から134台前半で推移した(図2-3-3、図2-3-4)。

業種別寄与度をみると、非鉄金属工業が下降に寄与したものの、窯業・土石製品工業などが上昇に寄与し、総合で前年を上回った(図2-3-7)。

【鉱工業指数】

鉱工業製品の生産量、出荷量、在庫量を基準年を100として(令和2年=100)指数化したものです。好況時にはモノがよく売れ、企業が製品を増産するため生産、出荷とも上昇します。景気が悪化してくるとモノが売れなくなるため出荷の減少、在庫の増加局面を経て生産の減少に至ります。

鉱工業指数(生産・出荷・在庫)の推移

図2-3-1 鉱工業指数(年次、原数値)

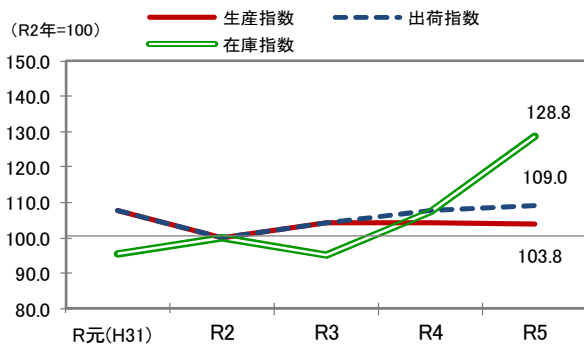


図2-3-2 鉱工業指数(原数値)前年比

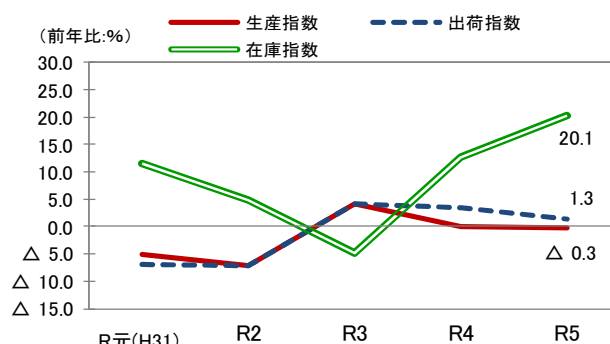


図2-3-3 鉱工業指数(月次、季節調整値)

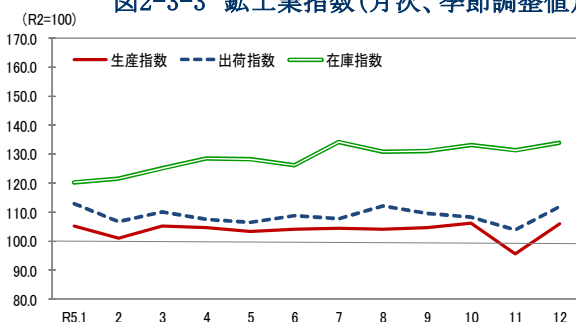
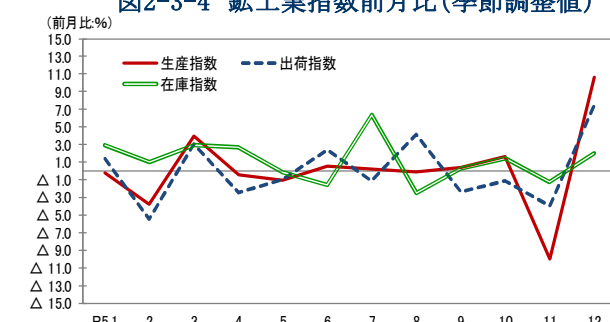


図2-3-4 鉱工業指数前月比(季節調整値)



備考1 (資料:福島県統計課「鉱工業指数月報」より作成。)

鉱工業指数(生産・出荷・在庫)の業種別寄与度の推移【原指数】

図2-3-5 業種別寄与度【生産】

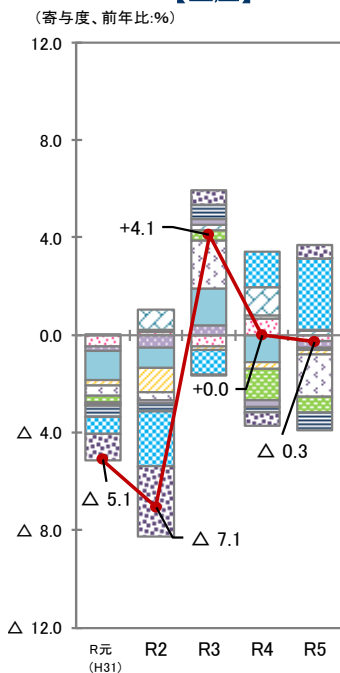


図2-3-6 業種別寄与度【出荷】

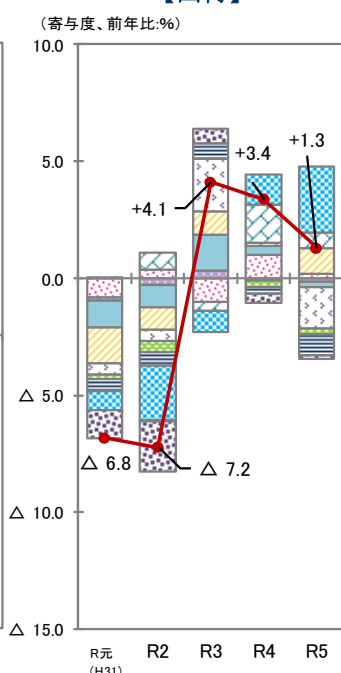
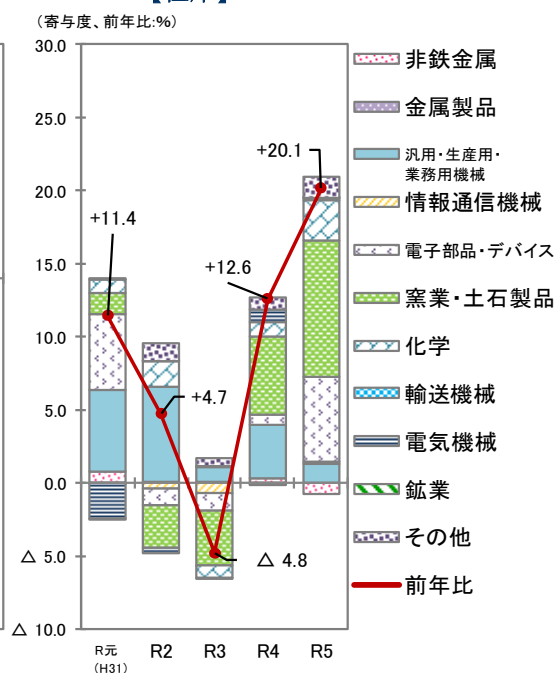


図2-3-7 業種別寄与度【在庫】



備考1 (資料:福島県統計課「鉱工業指数月報」より作成。)

【 指標は P.68~P.76に掲載 】

(参考1) 鉱工業指数(原指数)

鉱工業指数(原指数)の1年間の推移をみると、生産指数は95.9から115.9の間で推移し、1月から6月と10月で前年同月を上回った。
出荷指数は96.0から125.4の間で推移し、1月から6月で前年同月を上回った。
在庫指数は、123.3から135.4の間で推移した。全ての月で前年同月を上回った(図参考1)。

(参考2) 鉱工業財別生産指数(原指数)

鉱工業財別生産指数の動きを寄与度でみると、非耐久消費財が上昇に寄与し、鉱工業用生産財などが下降に寄与した(図参考2)。

【財別分類】

- 最終需要財 (生産活動から離れて最終製品となるもの)
 - 投資財・・・資本形成に向けられるもの
 - ・資本財・・・設備投資に向けられるもの(医療器具、金型等)
 - ・建設財・・・建設投資に用いられるもの(コンクリート、橋りょう等)
 - 消費財・・・家計で消費されるもの
 - ・耐久消費財・・・想定耐用年数が1年以上のもの(デジタルカメラ、携帯電話等)
 - ・非耐久消費財・・・想定耐用年数が1年未満で、比較的購入単価が安いもの(食料品、着衣等)
- 生産財 (原材料・燃料として生産活動に再投入されるもの)
 - 鉱工業用生産財・・・鉱工業の生産工程に再投入されるもの(自動車車体部品、半導体部品等)
 - その他生産財・・・鉱工業以外の生産活動に再投入されるもの(農薬等)

(参考3) 在庫循環図(原指数)

令和5年の在庫循環図で生産活動の動きをみると、全期で在庫積み上がり局面(景気後退初期)となった(図参考3)。

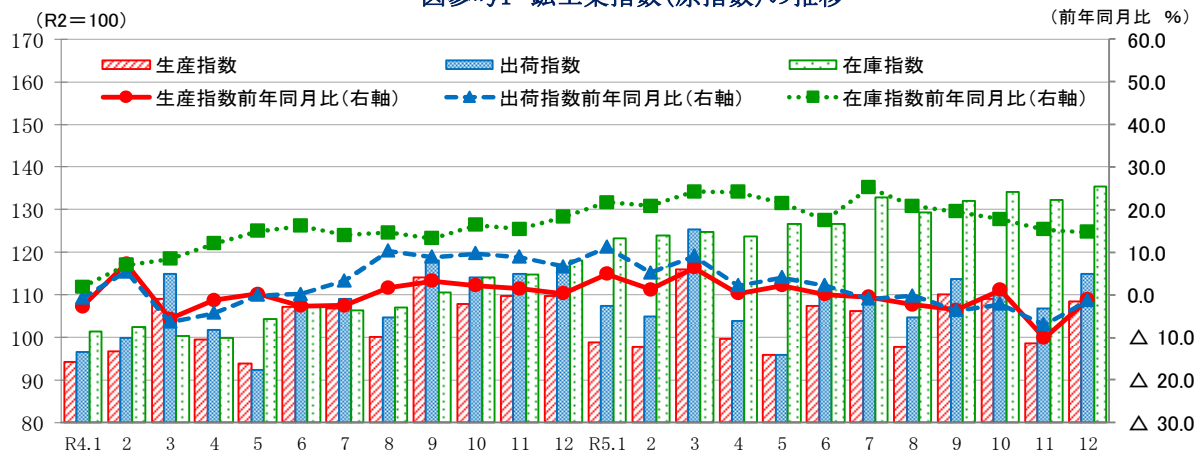
【在庫循環図】

企業は、将来の需給見通しや物価、金利などをにらみながら、在庫量をコントロールします。その結果、景気の局面ごとに「意図せざる在庫減局面」→「在庫積み増し局面」→「在庫積み上がり局面」→「在庫調整局面」と在庫循環が起こります。

なお、循環の方向は、時計の針の動きとは反対になることが多いと言われています。

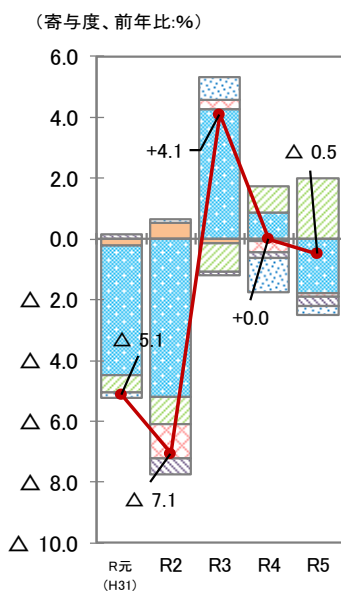
(参考)

図参考1 鉱工業指数(原指数)の推移



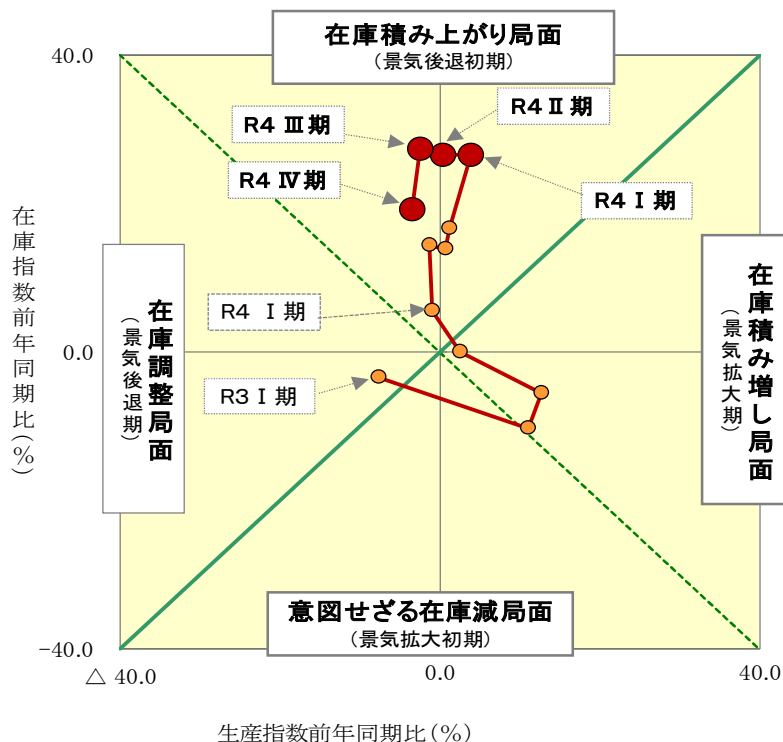
備考1 (資料:福島県統計課「鉱工業指数月報」より作成。)

図参考2 鉱工業財別生産指数寄与度(原指数)



- 資本財
- 建設財
- 耐久消費財
- 非耐久消費財
- 鉱工業用生産財
- その他生産財
- 前年比

図参考3 在庫循環図(原指数)の動き



備考1 (四半期値のI期は1~3月期、II期は4~6月期、III期は7~9月期、IV期は10~12月期。)
 2 (生産指数、在庫指数は四半期平均値。)
 3 (資料:福島県統計課「鉱工業指数月報」より作成。)

4 雇用・労働

(1) 新規求人倍率

令和5年の新規求人倍率(原数値)は2.03倍、前年差0.13ポイント下降し、3年振りに前年を下回った(図2-4-1)。

新規求人数は年間平均で13,907人、前年比2.5%減となり、3年振りに前年を下回った。新規求職申込件数は年間平均で6,838件、前年比3.7%増となり、12年振りに前年を上回った(図2-4-2)。

地域別の新規求人倍率(原数値)をみると、最も高い倍率は県中・県南地域で2.21倍となり、次いで相双地域が2.16倍、会津地域が2.04倍、いわき地域が1.96倍、県北地域が1.83倍となった(図2-4-3)。

新規求人倍率(季節調整値)の1年間の推移をみると、2.07倍程度の高い水準で振れを伴いながら推移した(図2-4-4)。

【新規求人倍率と有効求人倍率】

「新規求人」とは、当月受け付けた求人を指し、前月から未充足のまま繰り越された求人と新規求人を合わせたものを「有効求人」といいます。同様に、「新規求職」は当月受け付けた求職をいい、「有効求職」は前月から繰り越された求職と新規求職の合計です。有効求人倍率が低いと求職者の割には求人数が少なく雇用情勢が悪化しており、反対に倍率が高いと雇用情勢が良いことを示します。雇用情勢の最新の動きをみるには新規求人倍率をみます。なお、求人倍率は、求人数÷求職者数となりますが、通常公表されている求人倍率は季節調整値のため一致しません。

新規求人倍率等の推移

図2-4-1 新規求人倍率(原数値)

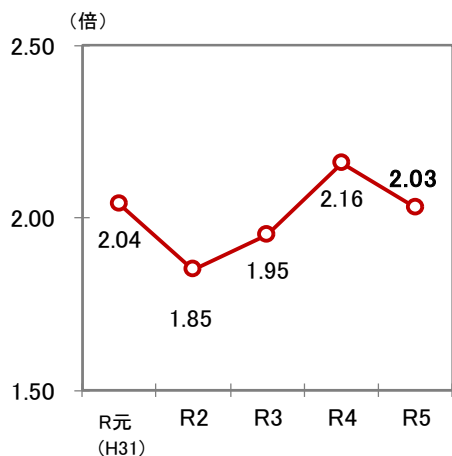


図2-4-2 新規求人数、新規求職者数及び前年比

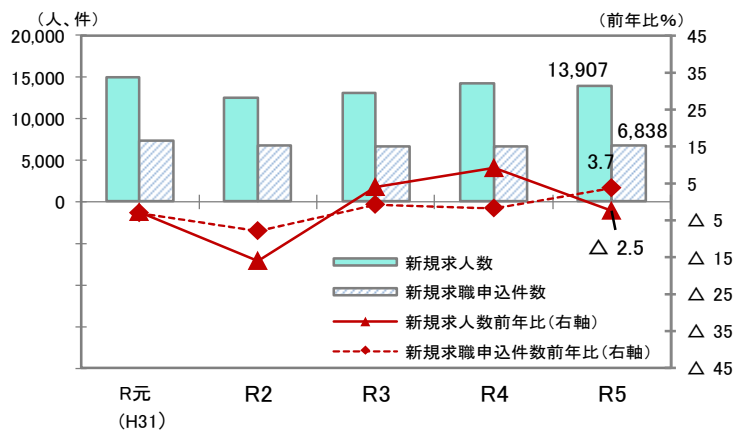


図2-4-3 地域別新規求人倍率(原数値)

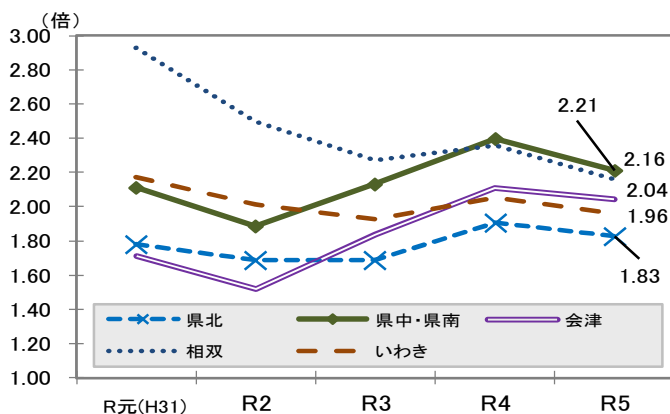
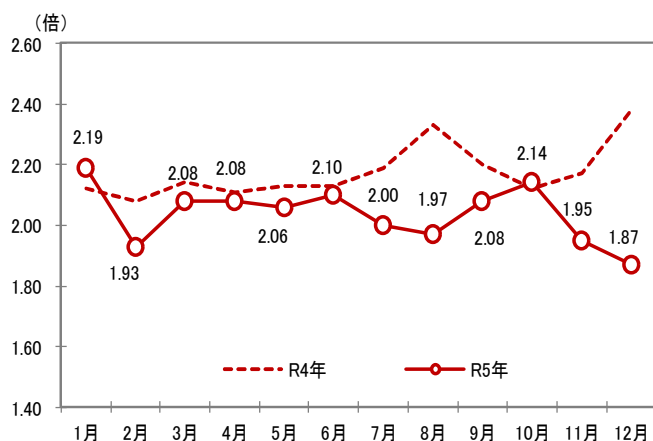


図2-4-4 新規求人倍率(季節調整値)月次



備考1 (資料: 福島労働局職業安定部「公共職業安定所業務取扱月報」より作成。)

【 指標は P.77に掲載 】

(2) 有効求人倍率

令和5年の有効求人倍率(原数値)は1.39倍で、前年差0.03ポイント下降し、3年振りに前年を下回った

(図2-4-5)。

令和5年の有効求人数は年間平均で39,492人、前年比1.5%減となり、3年振りに前年を下回った。有効求職者数は年間平均で28,326人、前年比0.2%増となり、4年連続で前年を上回った(図2-4-6)。

地域別の有効求人倍率(原数値)をみると、最も高かったのは県中・県南地域で1.53倍、次いで相双地域が1.50倍、会津地域が1.45倍、いわき地域が1.27倍、県北地域が1.25倍となった。また、有効求人倍率の最も高い県中・県南地域と最も低い県北地域との地域間格差は0.28ポイントとなり、前年の0.36ポイントから縮小した

(図2-4-7)。

有効求人倍率(季節調整値)の1年間の推移をみると、1月の1.46倍から12月の1.35倍まで下降基調で推移している(図2-4-8)。

(参考1) 職業別有効求人倍率等の状況

令和5年の職業別有効求人倍率をみると、事務などの一部の職種を除いて1.00倍を上回っており、特に保安、建設・採掘といった職種で高倍率となった(図参考1)。

有効求人倍率等の推移

図2-4-5 有効求人倍率(原数値)

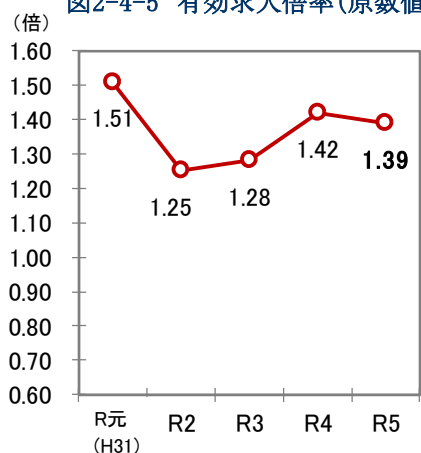


図2-4-6 有効求人人数、有効求職者数及び前年比

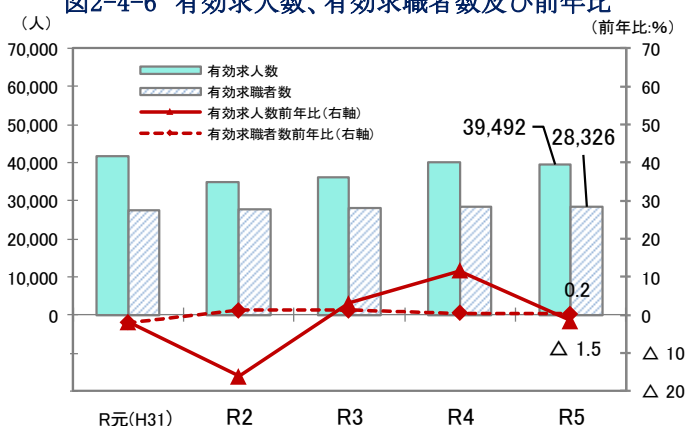


図2-4-7 地域別有効求人倍率(原数値)

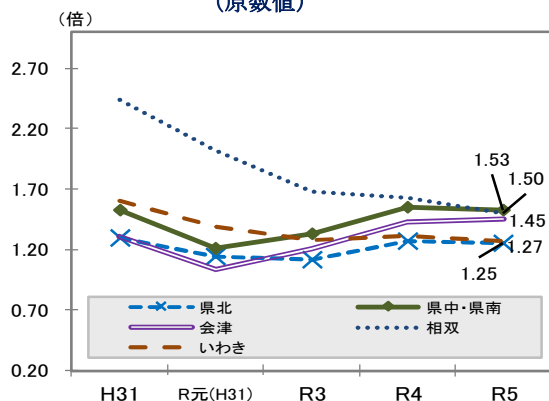
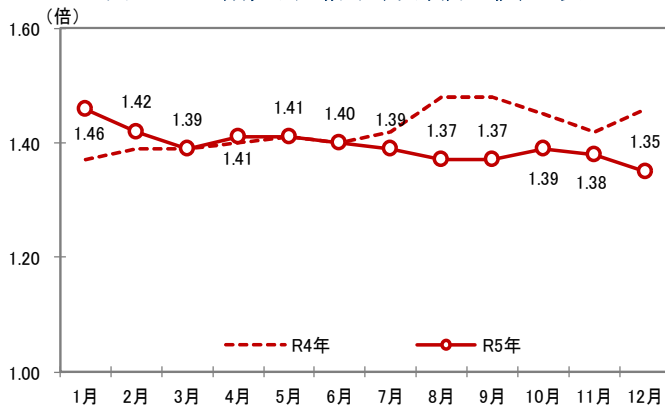


図2-4-8 有効求人倍率(季節調整値)月次

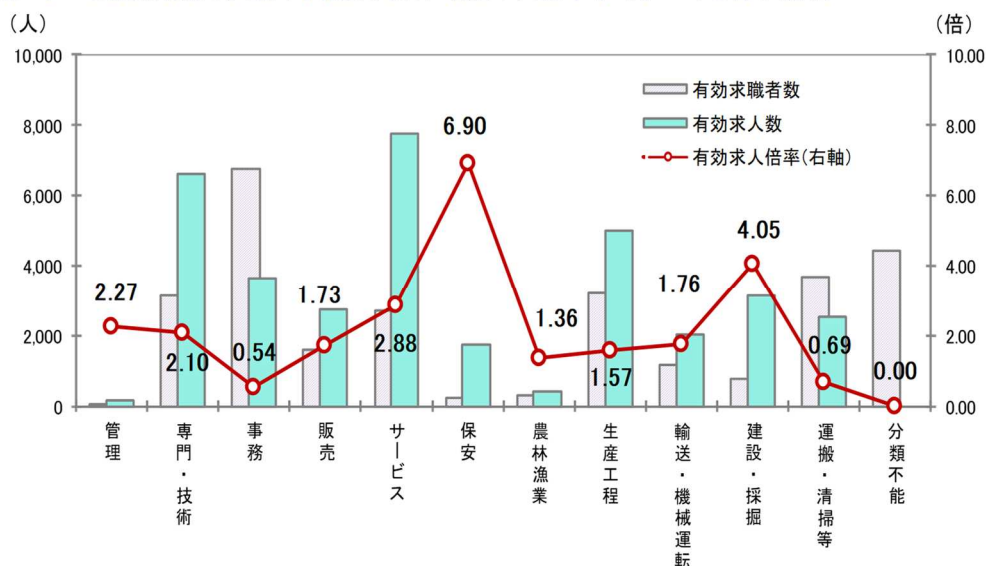


備考1 (資料:福島労働局職業安定部「公共職業安定所業務取扱月報」より作成。)

【 指標は P.78に掲載 】

(参 考)

図参考1 職業別有効求人倍率、有効求職者・有効求人数年平均(パートを含む・常用)



備考1 (資料:福島労働局職業安定部「公共職業安定所業務取扱月報」より作成。)

(3) 雇用保険受給者実人員

令和5年の雇用保険(基本手当基本分)受給者実人員は年間平均で6,031人、前年比3.0%減となり、3年連続で前年を下回った(図2-4-9)。

【雇用保険受給者実人員】

雇用保険の被保険者が離職後、再就職先が見つからないために失業等給付を受け取っている人の数です。失業動向を示すもので、受給者の増加は雇用情勢の悪化を示します。景気の動きと逆に動きます。

(参考) 企業整備件数及び人員整理状況

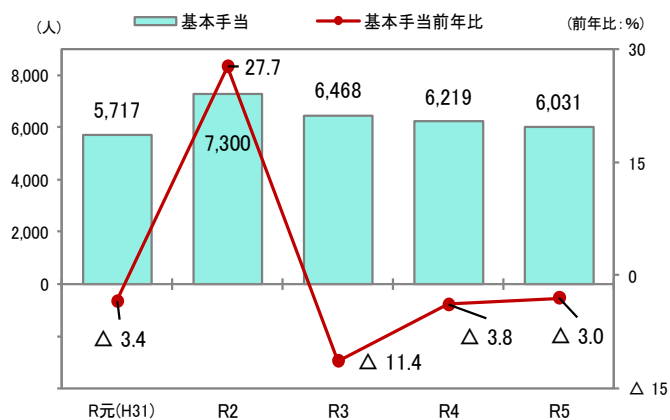
令和5年の企業整備件数は51件で前年比22.7%減、人員整理は888人で前年比24.0%減となった(図参考)。

【企業整備件数及び人員整理状況】

企業が事業の継続が思わしくないことを理由に再構築(リストラ)を行うことで、事業の継続を図るための人員整理を行った企業件数及び人員整理人数のうち10人以上の案件を各公共職業安定所調べにより集計したものです。

雇用保険受給者実人員の推移

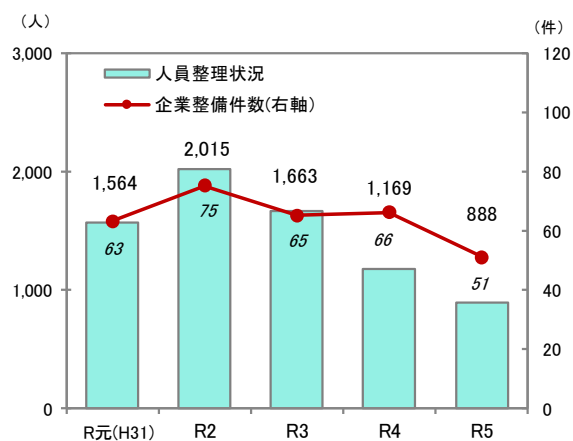
図2-4-9 雇用保険受給者実人員(年間平均)



備考 (資料: 福島労働局職業安定部「雇用失業情勢」より作成。)

【 参 考 】

図参考2 企業整備件数及び人員整理状況



備考1 (資料: 福島労働局職業安定部「最近の雇用失業情勢」より作成。)

【 指標は P.78~P.79に掲載 】

(4) 現金給与総額指数

令和5年の現金給与総額指数(事業所規模5人以上)は102.5、前年比3.1%減となり、3年振りに前年を下回った(図2-4-11)。

1年間の推移をみると、7月から9月以外のすべての月で前年を下回って推移した(図2-4-11)。

また、産業別でみると、建設業は2年振りに、製造業及び医療・福祉業は3年振りに前年を下回った(図2-4-12)。

【現金給与総額指数】

現金給与総額とは、賃金、給与、手当、賞与など労働の対価として使用者が労働者に支払ったものをすべて合計したもので、所得税、社会保険料等を差し引く前の金額です。これを基準年を100として(現在は令和2年=100)指数化したものです。一般に、賞与のある6、7月や12月は指数が高くなる季節性があるため、前年同月比でみる必要があります。

(5) 所定外労働時間指数

令和5年の所定外労働時間指数(事業所規模5人以上)は111.7、前年比6.3%減となり、3年振りに前年を下回った(図2-4-13)。

1年間の推移をみると、すべての月で前年を下回り、減少傾向となっている(図2-4-13)。

また、産業別でみると、建設業は2年連続で、製造業は3年振りに、医療・福祉業は2年振りに前年を下回った(図2-4-14)。

【所定外労働時間指数】

所定外労働時間とは、残業や早出・休日出勤などのことです。これを基準年を100として(現在は令和2年=100)指数化したものです。景気が良くなると、生産活動が活発化し、残業時間の増加で対応することから、景気に敏感に反応します。

現金給与総額指数の推移

図2-4-11 現金給与総額指数及び前年比

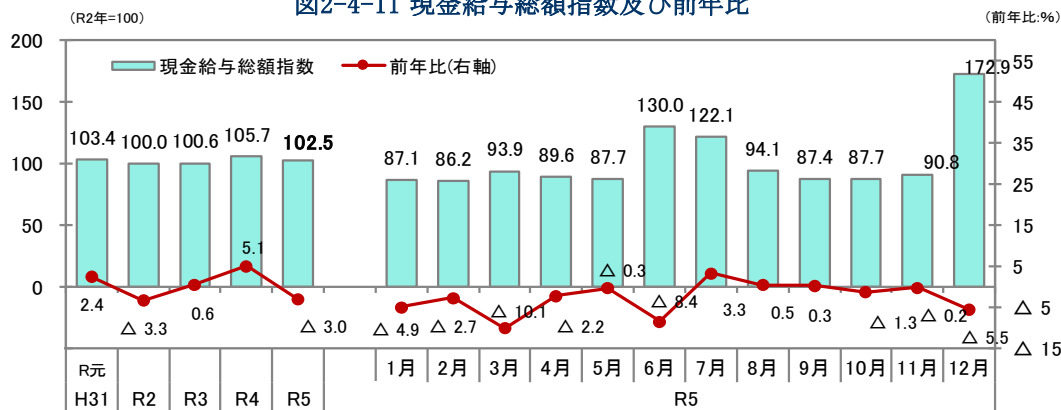
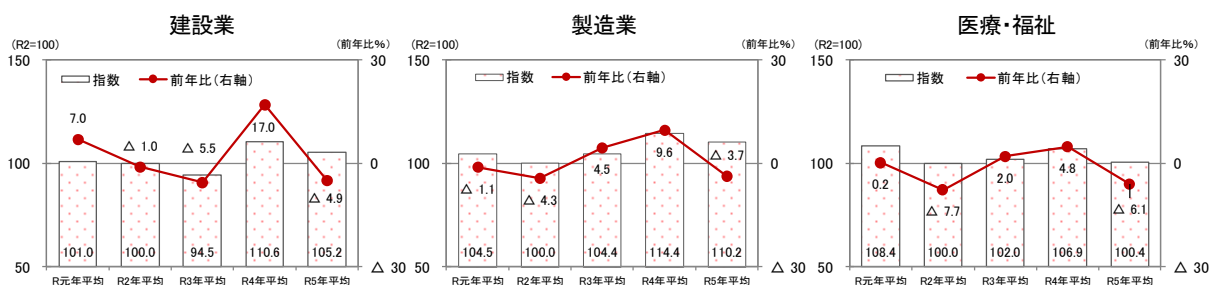


図2-4-12 産業別の現金給与総額指数及び前年比(参考・抜粋)



所定外労働時間指数の推移

図2-4-13 所定外労働時間指数及び前年比

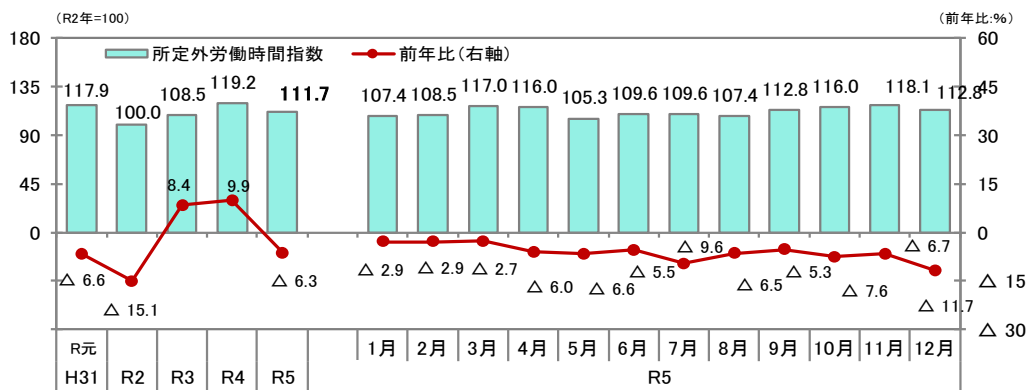
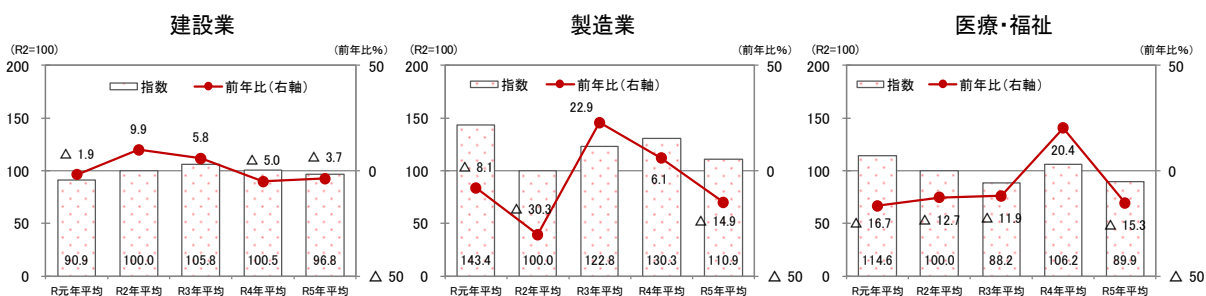


図2-4-14 産業別の所定外労働時間指数及び前年比(参考・抜粋)



備考1 (資料: 福島県統計課「福島県の賃金、労働時間及び雇用の動き」より作成。)

【 指標は P.79~P80に掲載 】

(6) 常用雇用指数

令和5年の常用雇用指数(事業所規模5人以上)は100.0、前年比1.4%増となり、2年連続で前年を上回った(図2-4-15)。

1年間の推移をみると、全ての月で前年を上回っている(図2-4-15)。

また、産業別にみると、建設業は4年連続、製造業は2年連続、医療・福祉業は3年連続で前年を上回った(図2-4-16)。

【常用雇用指数】

常用雇用者とは、事業所に雇われている人の数で、一般労働者のほかパートタイム労働者を含みます。これを基準年を100として(現在は令和2年=100)指数化したものです。求人や求職のような希望の数を表すものと違って、実際に雇われている雇用情勢の実態を表します。

(7) パートタイム労働者比率

令和5年のパートタイム労働者比率(事業所規模5人以上)は26.7%、前年差0.7ポイント増となり、2年連続で前年を上回った(図2-4-17)。

常用労働者数は674,429人、前年差9,339人増、2年連続で前年を上回った。このうち一般労働者数は494,310人、前年差1,796人増となり、2年連続で前年を上回った。また、パートタイム労働者数は180,119人、前年差7,543人増となり、2年連続で前年を上回った(図2-4-18)。

1年間の推移をみると、年間を通して25~28%の間で推移し、ほぼ横ばいでの動きとなった(図2-4-17)。

【パートタイム労働者比率】

パートタイム労働者比率とは、調査期間末のパートタイム労働者数を常用労働者数(当月末労働者数)で除して作成したものです。

常用雇用指数の推移

図2-4-15 常用雇用指数及び前年比

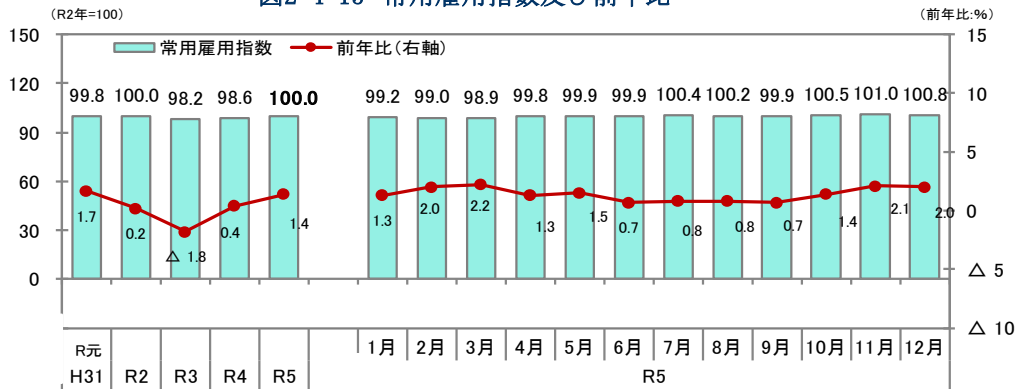
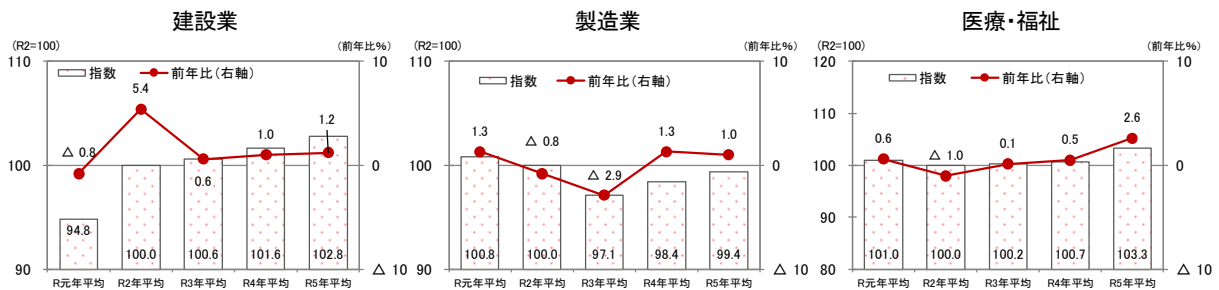


図2-4-16 産業別の常用雇用指数及び前年比(参考・抜粋)



パートタイム労働者比率の推移

図2-4-17 パートタイム労働比率及び前期(年・月)差

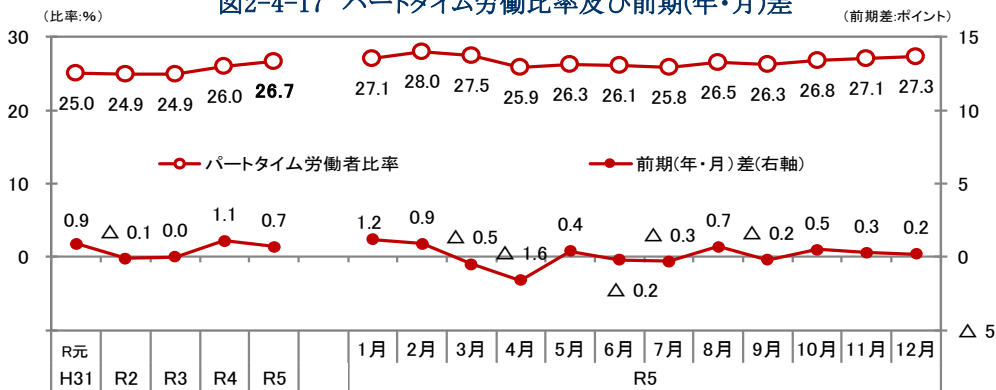
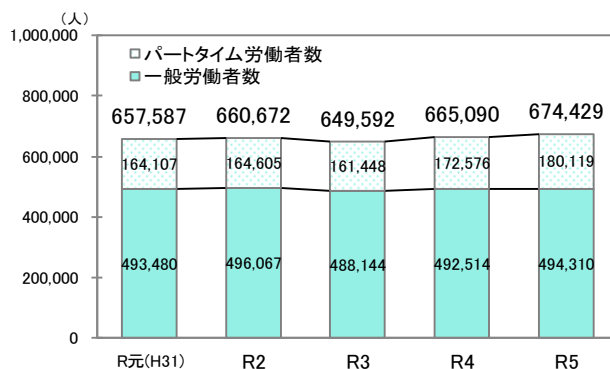


図2-4-18 常用労働者数、パートタイム労働者数



備考1 (資料:福島県統計課「福島県の賃金、労働時間及び雇用の動き」より作成。)

【 指標は P.80に掲載 】

5 物価

(1) 国内企業物価指数

令和5年の国内企業物価指数(総平均)は119.7、前年比4.2%増となり、3年連続で前年を上回った(図2-5-1、図2-5-2)。

大類別の状況を見ると、「スクラップ類」は下降したが、その他の項目では上昇した。上昇に最も寄与したのは「工業製品」で、エネルギーや原材料費の高騰を背景にした価格転嫁の動きにより、上昇した(図2-5-1、図2-5-2)。

1年間の推移をみると、国内企業物価指数(総平均)は全ての月で前年を上回った(図2-5-3)。

(参考) レギュラーガソリン価格(県)、原油価格(WTI)の推移

令和5年はWTI原油価格で見ると70～87ドル/バレル程度で推移し、年末には73.04ドル/バレルとなった。
レギュラーガソリン価格は1月から6月まで上昇の動きが続き、9月には187.6円/Lとなったが、10月以降は次第に下降し、12月には176.9円/Lとなった(図参考1)。

【国内企業物価指数】

出荷や卸売段階での企業間の取引価格の動きを示す指標で、景気動向に敏感に反応します。景気が過熱してモノの需給が引き締まると、企業物価は上昇し、逆に不況期には下落します。日本は原材料を多く輸入に依存しているため、海外市況や為替相場に左右されやすい側面もあります。

国内企業物価指数(年次)の推移

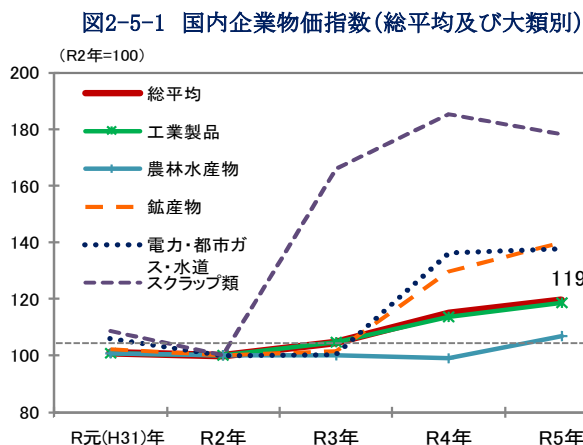
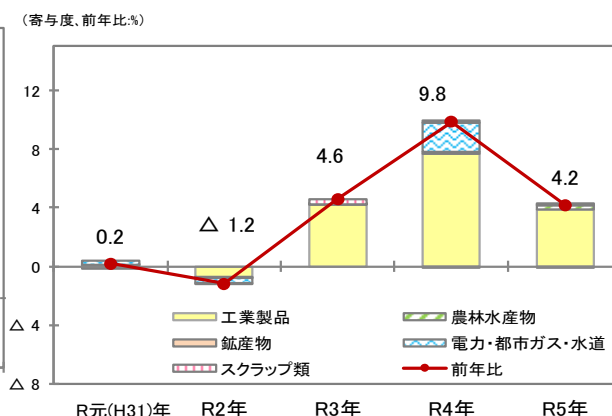
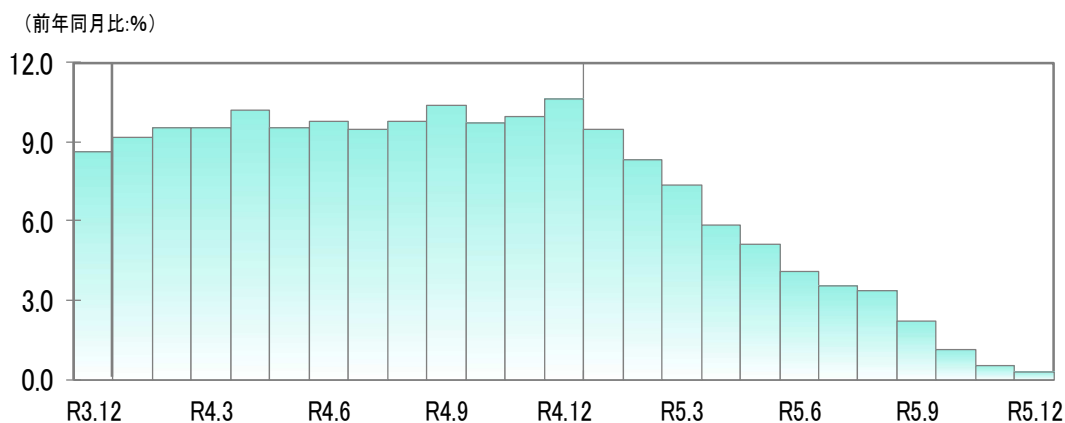


図2-5-2 大類別寄与度及び前年比(総平均)



国内企業物価指数(月次)の推移

図2-5-3 国内企業物価指数(総平均)前年同月比

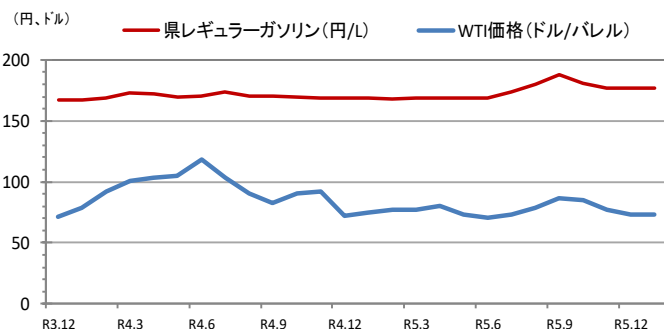


備考1 (資料: 日本銀行「企業物価指数」より作成。)

【 指標は P.81に掲載 】

(参考)

図参考1 レギュラーガソリン価格(県)、原油価格(WTI)の推移



備考1 (県レギュラーガソリン) (資料: 資源エネルギー庁「石油製品価格調査」より作成。) 毎月第2月曜の値
備考2 (WTI原油) (資料: 日本経済新聞社「内外商品相場」より作成。) 月間平均値

(2) 福島市消費者物価指数

令和5年の福島市消費者物価指数(総合)は105.6、前年比3.3%増となり、2年連続で前年を上回った(図2-5-6、図2-5-7)。

「生鮮食品を除く総合」は105.3、前年比3.1%増となり、2年連続で前年を上回った。

「生鮮食品及びエネルギーを除く総合」は104.1、前年比4.0%増となり、2年連続で前年を上回った。

「食料(酒類を除く)及びエネルギーを除く総合」は101.3、前年比2.6%増となり、3年振りに前年を上回った(図2-5-6、図2-5-7)。

消費者物価指数の主要な費目別指数の推移をみると、「食料」が2年連続で上昇したほか、「住居」と「家具・家事用品」は5年連続、「被服及び履物」、「教育」、「教養娯楽」は3年連続、「交通・通信」が3年振りでそれぞれ上昇した一方、「光熱・水道」が3年振りの下降となった(図2-5-8)。

1年間の推移をみると、消費者物価指数(総合)は年間を通して、上昇傾向で推移した(図2-5-9)。

費目別寄与度をみると、「食料」や「住居」、「家具・家事用品」、「交通・通信」、「教育」、「教養娯楽」、「その他(被服及び履物、保健医療、諸雑費)」が全ての月で上昇に寄与した。一方で、「光熱・水道」が1月以外の全ての月で下降に寄与した(図2-5-10)。

【消費者物価指数】

消費者が平均的に購入する商品やサービスを基準年を100(現在は令和2年=100)と固定して、物価がどのように変化しているかを指数化したものです。また、生鮮食品は天候などの要因によって価格が大幅に変動するため、他の商品やサービスの価格動向が見えにくくなるので「生鮮食品を除く総合」でみることもあります。また、税制や社会保障制度の変更や原油等のエネルギー価格の動向が影響を及ぼすことがあります。

福島市消費者物価指数(年次)の推移

図2-5-6 消費者物価指数

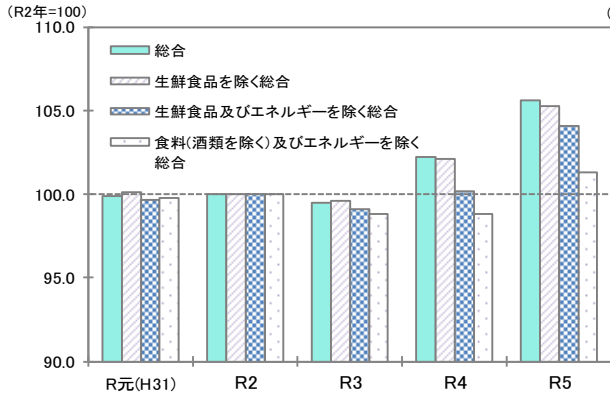


図2-5-7 消費者物価指数前年比

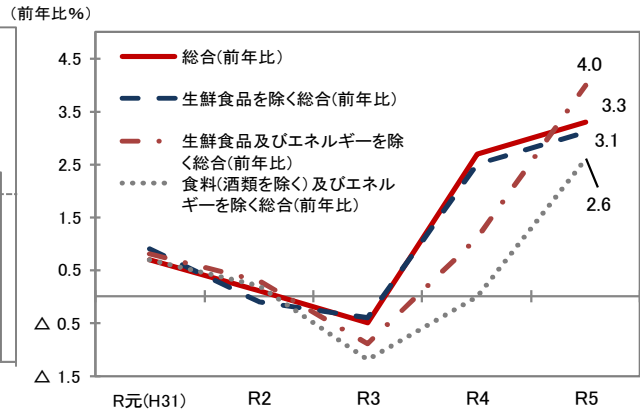
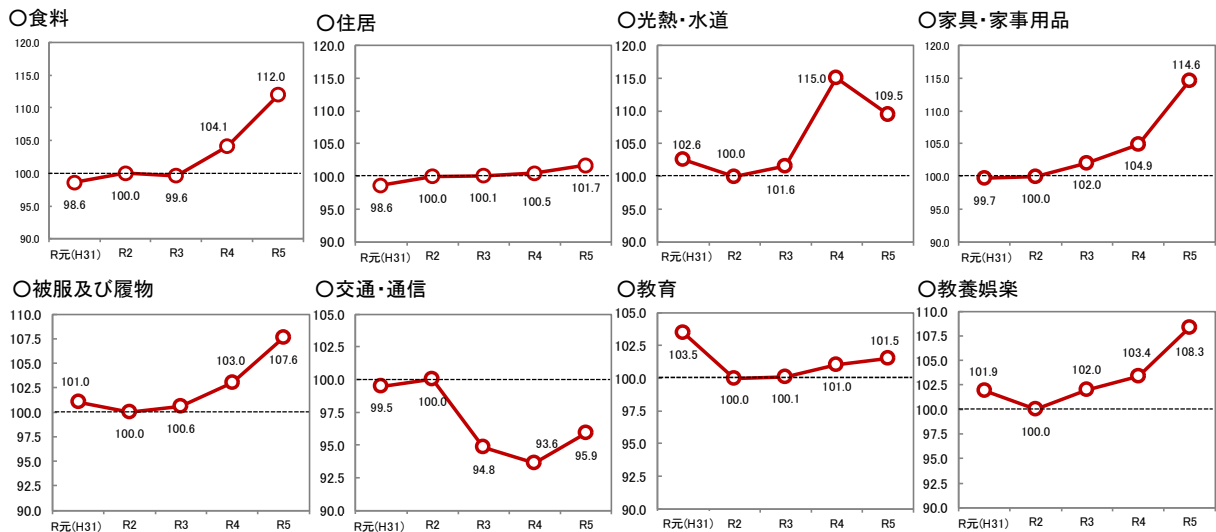


図2-5-8 主要な費目別指数(R2年=100)



福島市消費者物価指数(月次)の推移

図2-5-9 消費者物価指数(総合)(R2年=100)

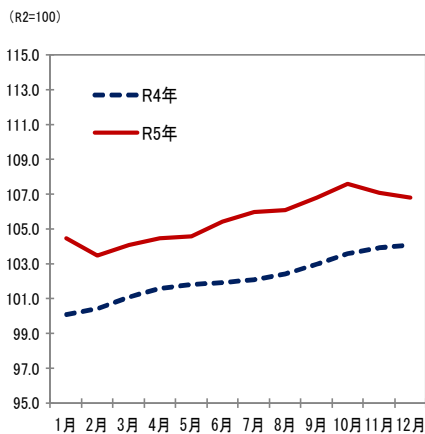
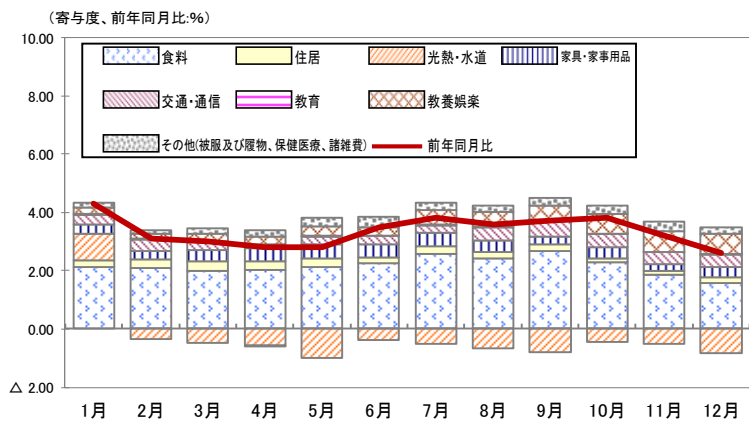


図2-5-10 費目別寄与度及び前年同月比



備考 (資料:総務省統計局「消費者物価指数」より作成。)

【 指標は P.82に掲載 】

6 企業関連

(1) 企業倒産

令和5年の企業倒産件数は80件、前年比21.2%増となり、2年連続で前年を上回った(図2-6-1)。

令和5年の企業倒産負債総額は135億26百万円、前年比8.4%増となり、3年連続で前年を上回った(図2-6-2)。

コロナ禍以前から業績が悪化していた企業や従前より厳しい資金繰りを続けてきた企業が、同業他社との競争や業界動向の変化に対応できず、事業継続を断念し倒産に追い込まれるケースが多いとみられ、令和5年の倒産件数は平成12年以降13番目、負債総額は平成12年以降18番目に多い数となった。

倒産件数を業種別にみると、「サービス業他」が25件で最も多く、次いで「建設業」が16件、「製造業」が15件、「小売業」が11件などとなった(図2-6-3)。

また、倒産件数を原因別にみると、「販売不振」が36件で最も多く、次いで「既往のシワ寄せ」が32件、「他社倒産の余波」が4件などとなった。販売不振、既往のシワ寄せ、売掛金等回収難を原因とするいわゆる「不況型倒産」は69件となり、全体の86.3%を占めた(図2-6-4)。

倒産件数の1年間の推移をみると、2月、6月、12月に10件以上となったが、その他の月では1件から7件の間を推移した(図2-6-5)。

一方、負債総額について、1件あたりの負債総額10億円以上の大型倒産は2件(前年と同数)、従業員数20人以上の倒産は9件(前年差+3件)発生した。

負債総額の1年間の推移をみると、年間を通して低水準なものの、大型倒産が2月及び6月に発生した(図2-6-5)。

【企業倒産】

法的な定義はなく、官庁統計に集計したものではありません。民間信用調査機関ごとに定義を設けて集計しています。「法的整理(破産や会社更生手続、民事再生手続等)」と「任意整理(銀行取引停止処分、内整理)」の大きく2つに分けることができます。

企業倒産件数及び負債総額(年次)の推移

図2-6-1 倒産件数及び前年比

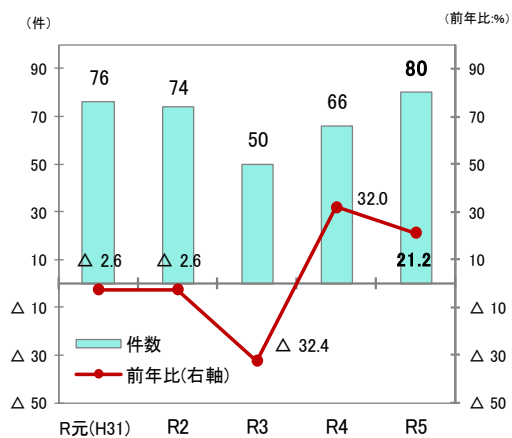


図2-6-2 負債総額及び前年比

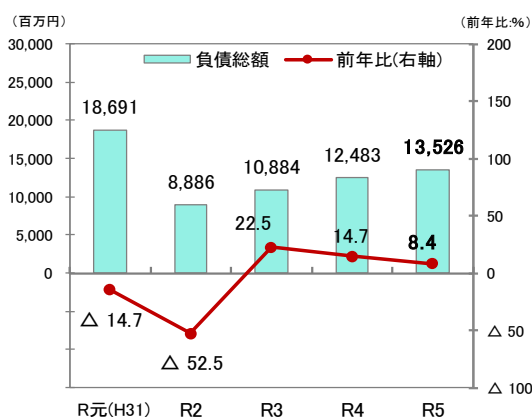


図2-6-3 業種別倒産件数

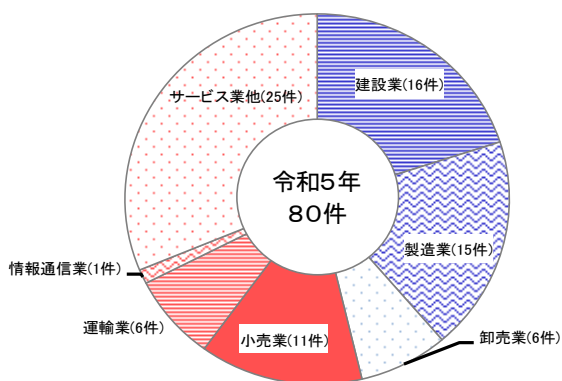
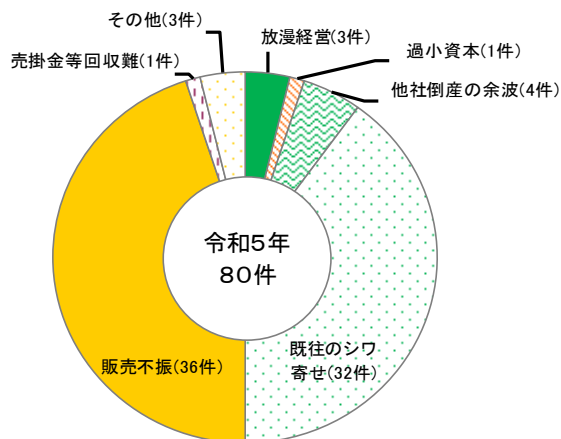
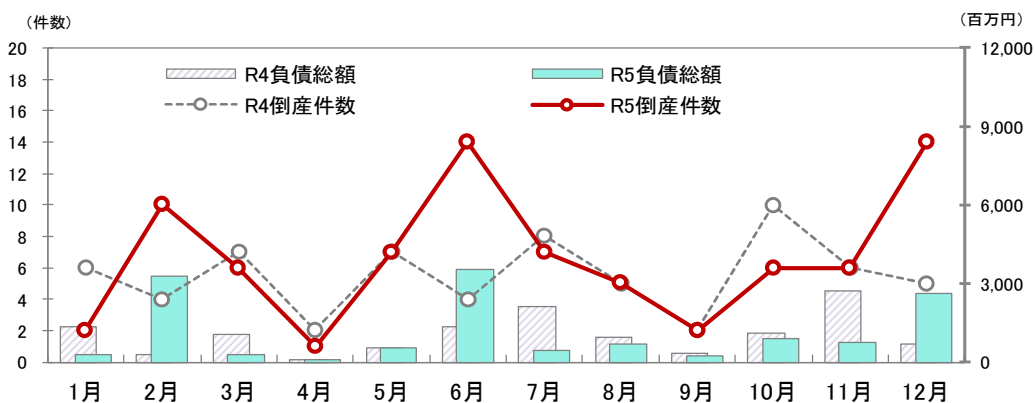


図2-6-4 原因別倒産件数



企業倒産件数及び負債総額(月次)の推移

図2-6-5 企業倒産件数、負債総額及び前年同月比



備考1 (資料:東京商工リサーチ(郡山支店・福島支店)「福島県企業倒産状況」より作成。)

【 指標は P.83~P.86に掲載 】

(2) 業況判断

(ア) 全国企業短期経済観測調査(福島県分)(業況判断DI)

日本銀行福島支店の「全国企業短期経済観測調査(福島県分)」によると、令和5年の全産業の業況判断DIは、3月調査で0ポイント、6月調査でマイナス4ポイント、9月調査でマイナス3ポイント、12月調査で0ポイントとなり、概ねマイナス圏で推移した(図2-6-6)。

業種別にみると、製造業は令和元年12月調査以降マイナスポイントで推移している。また、非製造業は年間を通して2ポイントから4ポイントの間で推移した(図2-6-6)。

【全国企業短期経済観測調査(日銀短観)】

業況等の現状・先行きに関する判断や、事業計画に関する実績・予測など、企業活動全般に関する調査項目について、日本銀行が四半期ごとに実施するビジネス・サーベイです。

調査対象は資本金2千万円以上であるため、いわゆる零細企業は対象にならない点に留意する必要があります。また、各支店(例:日銀福島支店)が公表する「支店短観」は、各地域の産業構造を反映するため、全国分の短観が調査・集計対象としていない先(大手企業の出先事務所等)も一部調査・集計対象としています。業況判断DIは業況(「収益を中心とした、業況についての全般的な判断」)が「良い」と回答した企業の割合から「悪い」と回答した企業の割合を差し引いた数値で、企業の収益性と相関があります。

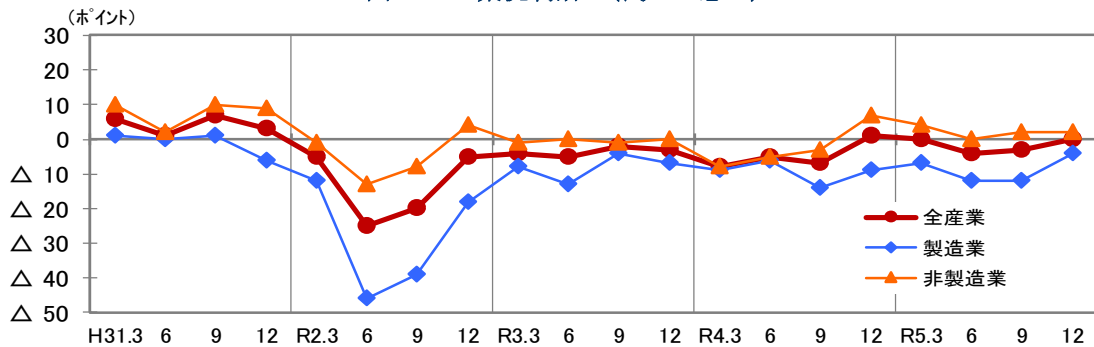
(イ) 中小企業景気動向調査(業況DI)

(公財)福島県産業振興センターの「中小企業景気動向調査」によると、令和5年の中小企業(全産業)の業況DIは、低調な動きが続き、年間を通してマイナス13ポイントからマイナス24ポイントの間で推移した(図2-6-7)。

業種別にみると、すべての業種で年間を通し、概ねマイナス圏内で推移した(図2-6-8~12)。

企業業況判断DIの推移

図2-6-6 業況判断DI(良い-悪い)

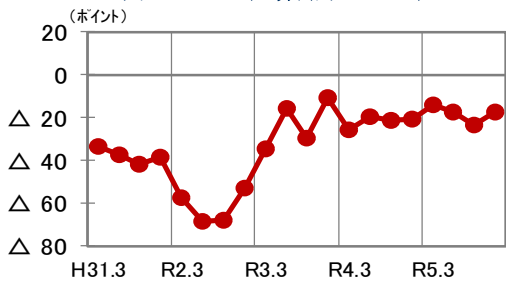


業況判断	R5.3	R5.6	R5.9	R5.12
全産業	0	△ 4	△ 3	0
製造業	△ 7	△ 12	△ 12	△ 4
非製造業	4	0	2	2

備考1 (資料:日本銀行福島支店「全国企業短期経済観測調査(福島県分)」より作成。)

中小企業業況DIの推移

図2-6-7 全産業(良い-悪い)



業況判断	R5.3	R5.6	R5.9	R5.12
全産業	△ 13.8	△ 17.2	△ 23.4	△ 17.3

図2-6-8 製造業(良い-悪い)

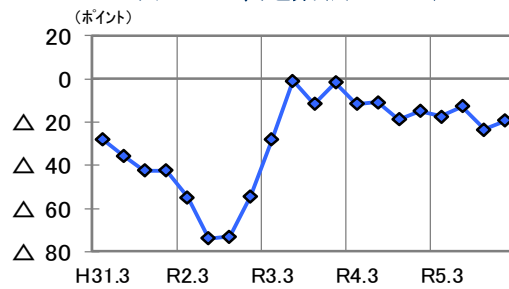


図2-6-9 建設業(良い-悪い)

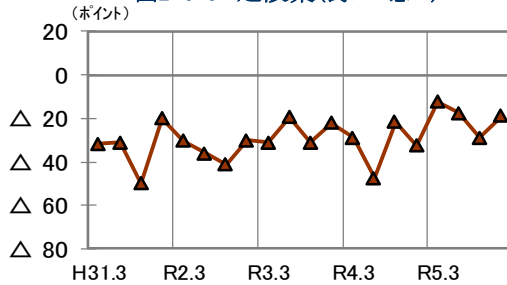


図2-6-10 卸売業(良い-悪い)

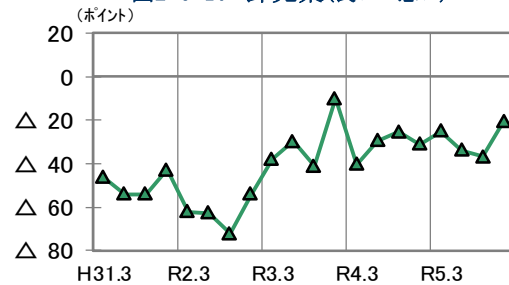


図2-6-11 小売業(良い-悪い)

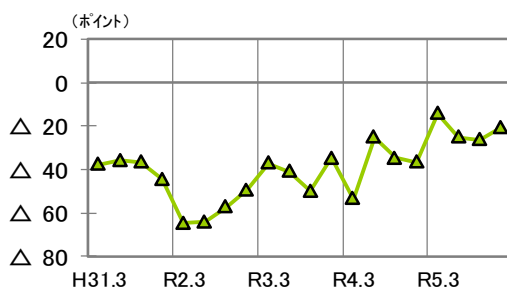
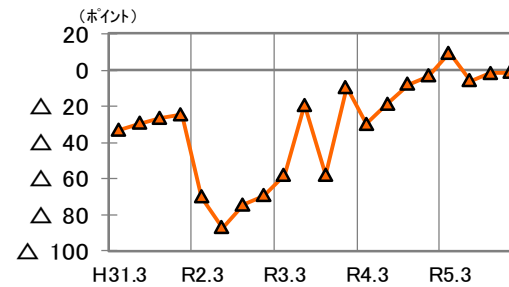


図2-6-12 サービス業(良い-悪い)



備考1 (資料:(公財)福島県産業振興センター「中小企業景気動向調査」より作成。)

【 指標は P.87~P.88に掲載 】

7 金融

(1) 金融機関預貸残高

(ア) 預金残高

県内金融機関(銀行、第二地銀、信用金庫)の令和5年末における預金残高は、総額は10兆3,234億円、前年比0.8%増となり、2年振りに前年を上回った(図2-7-1)。

金融機関別寄与度をみると、「銀行」、「信用金庫」は上昇に寄与したものの、「第二地銀」は下降に寄与した(図2-7-2)。

【預金残高】

預金残高の増減率は金融機関の信用力を示します。経営破綻が相次いで信用不安が起きれば、預金が流出します。法人預金は売上げ低迷による余資の減少や、預貸相殺の動きが続くと減少し、個人預金は収入が落ち込むと減少します。増加する理由には逆のことが言えます。

(イ) 貸出残高

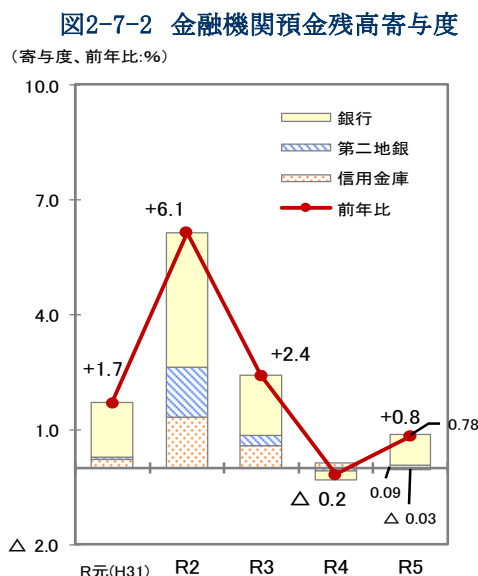
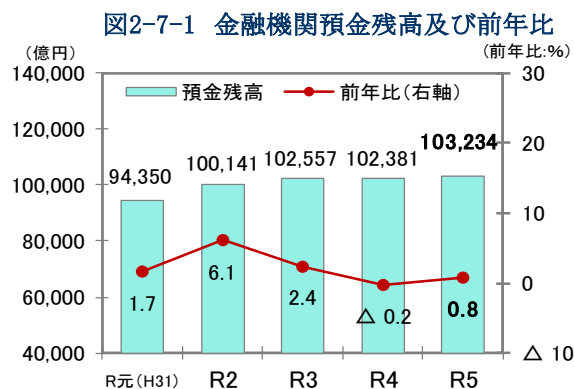
県内金融機関の令和5年末における貸出残高は、総額4兆9,005億円、前年比1.7%増となり、13年連続で前年を上回った(図2-7-3)。

金融機関別寄与度をみると、「銀行」、「信用金庫」は上昇に寄与したものの、「第二地銀」は下降に寄与した(図2-7-4)。

【貸出残高】

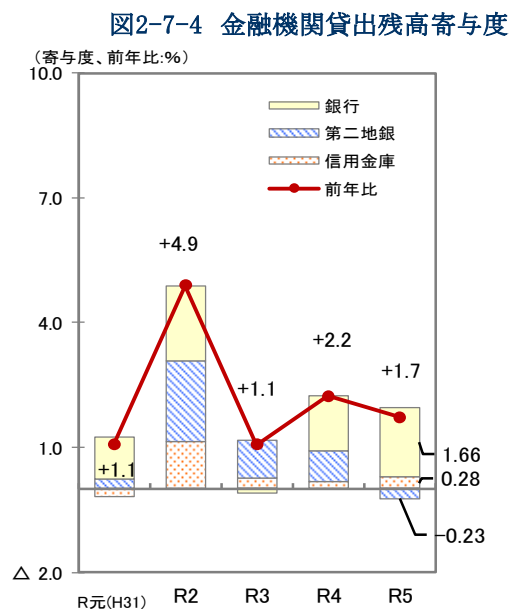
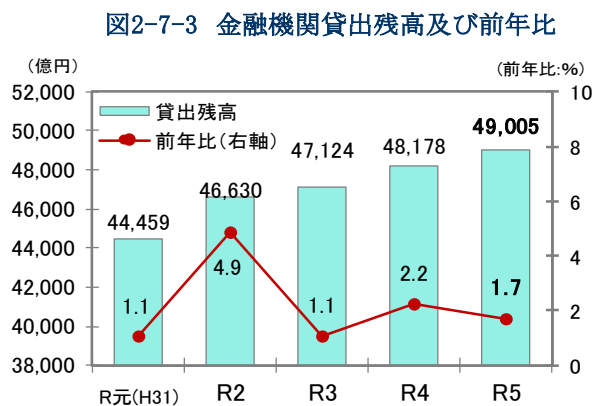
景気拡大期には企業が設備投資を増やし、資金需要が拡大するため貸出残高は増加します。法人向けは企業が新規借入よりも債務の返済を優先させたり、金融機関が不良債権処理を優先させたりすると、貸出は減少します。個人向けは住宅ローン等が堅調だと増加します。

金融機関預金残高(年次)の推移



備考1 (資料: 日本銀行福島支店資料により作成。)

金融機関貸出残高(年次)の推移



備考1 (資料: 日本銀行福島支店資料により作成。)

【 指標は P.89~P.90に掲載 】

(2) 貸出約定平均金利

県内金融機関の令和5年末における貸出約定平均金利は、地方銀行が0.703%で前年差0.011ポイント上昇、信用金庫が1.417%で前年差0.000ポイントとなった(図2-7-5)。

県内金融機関の貸出約定平均金利は、前年を上回った(図2-7-5)。

なお、全国と比較すると、令和5年も全国を下回っており、歴史的な低水準が続いている(図2-7-6)。

【貸出約定平均金利】

金融機関が過去に貸し出しを行った際の貸出金利を現在の貸出残高で加重平均したものです。銀行融資の金利を示す指標です。

貸出約定平均金利の推移

図2-7-5 金融機関別貸出約定平均金利(県)

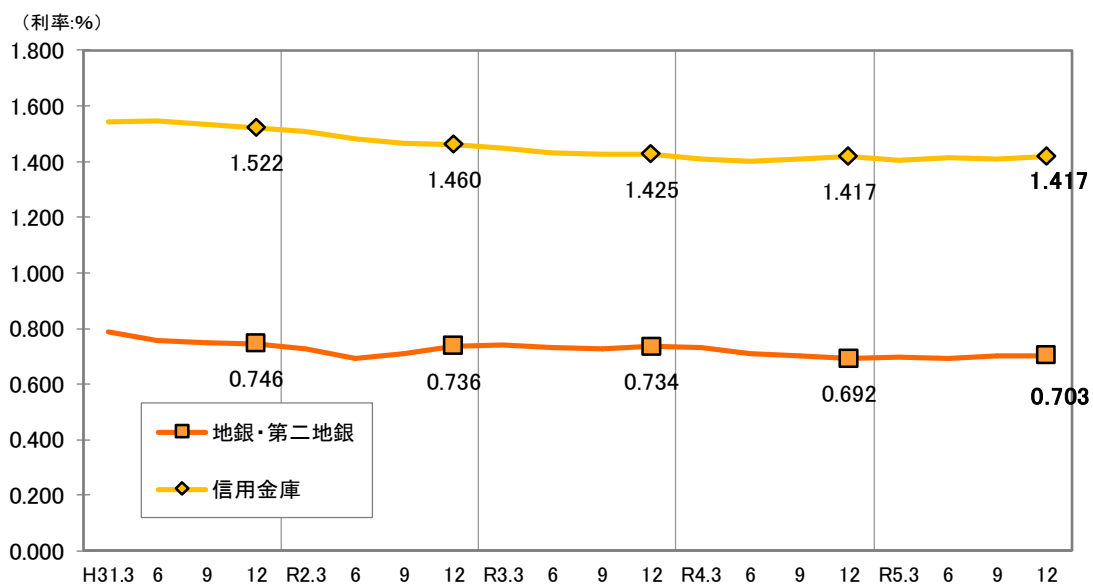
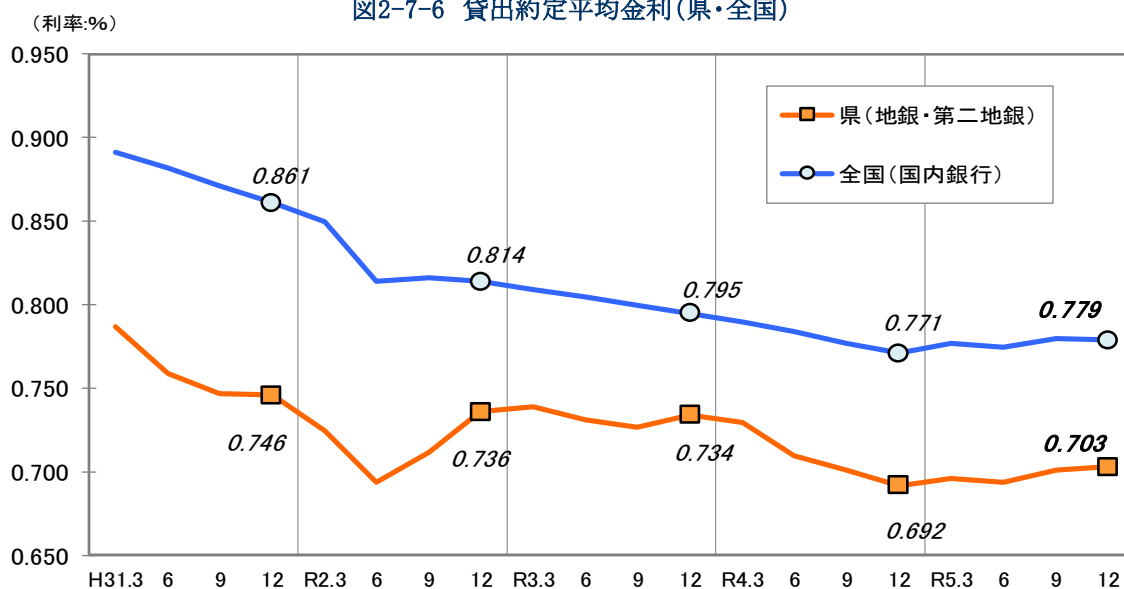


図2-7-6 貸出約定平均金利(県・全国)



備考1 県 (資料:日本銀行福島支店「福島県金融経済概況」より作成。)

備考2 全国(資料:日本銀行「貸出約定平均金利の推移」より作成。)

【 指標は P.90に掲載 】

8 市場

(1) 日経平均株価

令和5年の東証プライム市場日経平均株価(225種、期中平均値)は30,716円56銭、前年差3,458円77銭高となり、2年振りに前年を上回った(図2-8-1)。

1年間の推移(各月の期中平均値)をみると、年間を通して上昇し、26千円～33千円台で推移した。(図2-8-2)。

【日経平均株価】

日本経済新聞社が東京証券取引所プライム市場に上場している225銘柄(定期的に入れ替え)を対象に平均金額を算出したもので、株式市場全体の株価水準を示す代表的な指標です。株価が上昇すると、企業資産の含み益が増え、企業活動に好影響を与えます。また、株式取引に直接参加していない消費者や経営者にも大きな心理的影響を与えるため、景気の先行指標といわれます。

(2) 円相場

令和5年の東京外国為替市場の円相場(期中平均値)は、対ドルでは140円59銭、前年差9円1銭の円安で、3年連続で円安となった。一方、対ユーロでは152円05銭で前年差13円91銭の円安となった(図2-8-3)。

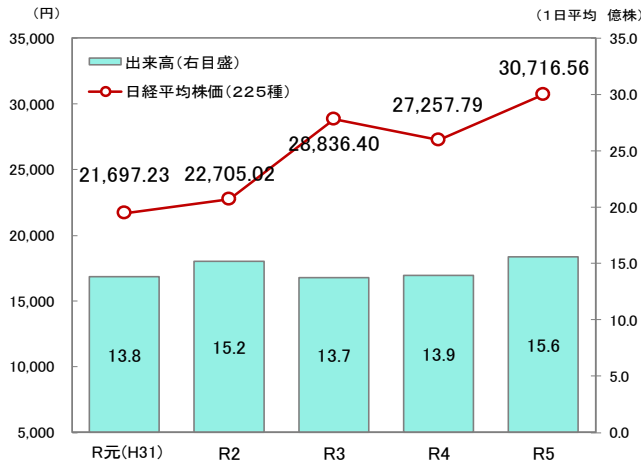
対ドルの1年間の推移(各月の期中平均値)をみると、1月に130円台で始まり、10月には149円台まで動くなど、大きく円安方向へ推移した。(図2-8-3)。

【円相場】

円とドルの交換比率(対ドルの為替レート)です。為替レートは商品の値段を決めるときと同様に需給バランスで決まります。その通貨を必要とする人が増えれば値上がりしますし、減れば値下がります。為替レートの変動は、外国貿易を行っている企業に直接的な影響を及ぼし、「円高」では輸出業者が損をして輸入業者が得をします。「円安」の場合は逆になります。また、円高になると輸入品価格が低下し、物価下落の要因となる一方、輸出価格が上昇し、国際競争力を低下させます。円相場が日本経済全体に与える影響はとても大きいので、政府・日銀が介入する場合があります。

日経平均株価の推移

図2-8-1 日経平均株価(期中平均値)及び出来高



【参考】
日経平均株価上昇・下落率の上位(R5年末日時点)

		日付	日経平均株価	変化率(%)
上昇率上位	1	2008.10.14 (リーマンショックによる急落からの反動)	9,447円57銭	14.15
	2	1990.10.02 (バブル崩壊による急落からの反動)	2万2,898円41銭	13.24
	3	1949.12.15 (年末金融逼迫による急落からの反動)	109円62銭	11.29
下落率上位	1	1987.10.20 (ブラックマンデー)	2万1,910円8銭	△ 14.90
	2	2008.10.16 (リーマンショック)	8,458円45銭	△ 11.41
	3	2011.3.15 (東日本大震災)	8,605円15銭	△ 10.55

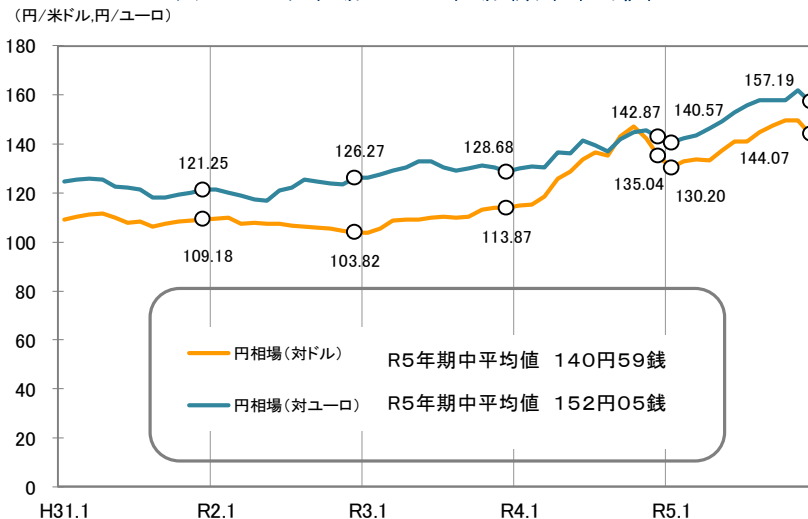
図2-8-2 日経平均株価(期中平均値)及び出来高



備考1 (資料: 日本経済新聞、東京証券取引所資料により作成。)

円相場の推移

図2-8-3 円相場・ユーロ相場(期中平均値)



備考1 (資料: 日本経済新聞より作成。)

【 指標は P.90に掲載 】

9 景気動向指数

福島県景気動向指数(CI)のうち、景気とほぼ一致して動く「一致指数」の動きをみると、平成20年後半、リーマン・ショックの影響から大幅に下降した後、平成21年3月にようやく上昇に転じ、平成23年2月まで上昇基調で推移した。

平成23年3月、東日本大震災により急激に下降したものの、翌月から持ち直しの動きに転じ、平成24年5月まで上昇基調となった。その後、海外経済の減速などから低調な動きがみられたものの、復興需要が県内景気をけん引し、平成24年10月から平成26年3月の消費税率引き上げ前の駆け込み需要期が終わるまで上昇傾向となった。平成26年4月は駆け込み需要の反動減が起こり、その後も生産活動が弱含んだことから下降が続いた。平成27年は、生産活動で弱い動きが続いたことに加え、求人関連指標は高水準ながらも増勢が鈍化し、一致指数は下降基調で推移した。この傾向は平成28年にもみられた。平成29年は生産活動の持ち直しや雇用環境の改善があった半面、建設需要の減少や労働環境の悪化などが影響し横ばいでの推移となった。平成30年は建設需要や生産活動が減少したが、雇用や労働環境が改善されたために、景気指数の推移は横ばいとなった。

令和元年(平成31年)10月には消費税率の引き上げ前の駆け込み需要があったものの、その後の反動減も影響し、下降基調で推移した。令和2年は、新型コロナウイルス感染症の影響により全体的に下降基調で推移したが、令和3年には、前年の低調からの持ち直しの動きが見られた。令和4年は、個人消費や雇用労働で緩やかな持ち直しや改善の動きがみられ、上昇基調で推移した。

令和5年は、新型コロナウイルス感染症の感染症上の位置付けの変更に伴う影響等から個人消費は緩やかな持ち直しが続いたものの、建設需要と雇用労働でやや弱い動きがみられ、下降基調で推移した。

【景気動向指数(CI(Composite Indexes)とDI(Diffusion Indexes)】

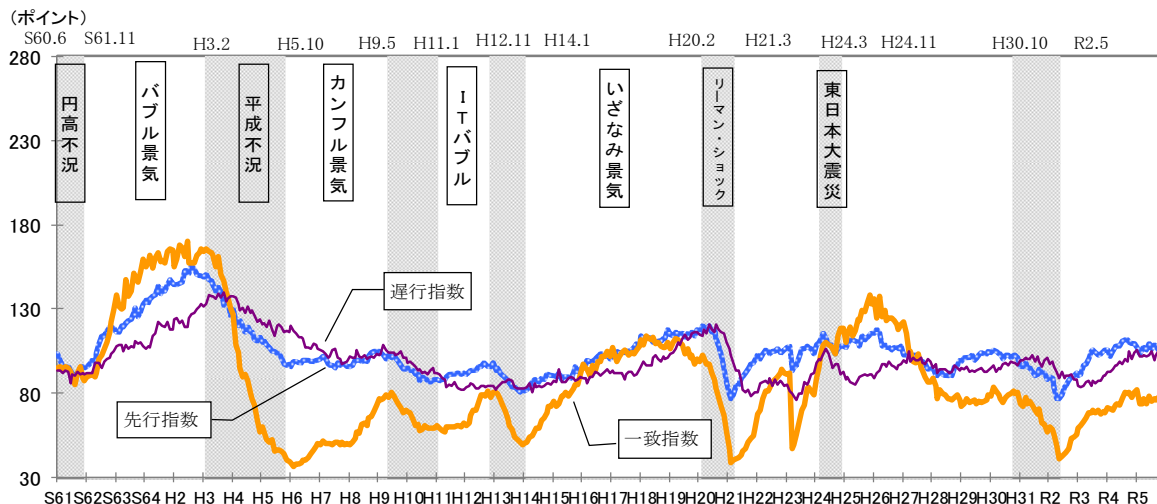
景気動向指数には、CI(コンポジット・インデックス)とDI(デフュージョン・インデックス)という2つの指数があります。CIとは、景気変動の勢いや大きさといった、景気の強弱を定量的に計測するための指数であり、各採用系列の変化率を合成して作成されます。また、DIとは景気の波及・浸透度合いや、景気の局面の判定を把握するための指数であり、採用系列の中で、上昇(拡張)を示している割合を計算することにより求められます。

景気動向指数は、景気に先行して動く先行指数、景気と一致して動く一致指数、景気に遅れて動く遅行指数の3つに分類することができます。一致指数は、景気の現状把握を行う場合に用いられます。また、先行指数は、一致指数よりも数か月先行して動くことから、景気の動きを予測するために、遅行指数は、一致指数から数か月～半年ほど遅行することから、景気の転換点や局面を確認するために、それぞれ用いられます。

※景気動向指数は、令和6年6月分(令和6年8月28日公表)より、平成27年基準から令和2年基準に改定しています。

景気動向指数(CI)の推移

図2-9-1 福島県景気動向指数

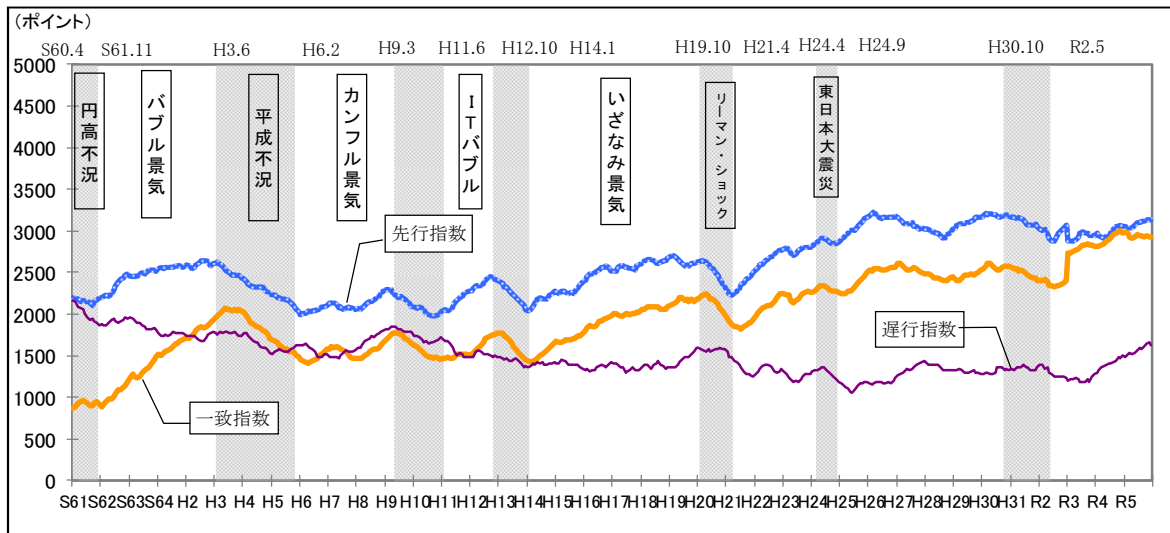


備考1 (シャドウ部分は景気後退期(内閣府経済社会総合研究所設定の景気基準日付による)を示している。)
 2 (平成27年=100。)
 3 (資料:福島県統計課「福島県景気動向指数」より作成。)

【 指標は P.91に掲載 】

(参考)

図参考1 福島県景気動向指数(累積DI)の年次推移



備考1 (シャドウ部分は景気後退期(内閣府経済社会総合研究所設定の景気基準日付による)を示している。)
 2 (比較のため、先行指数に2,500、遅行指数に2,000を加算している。)
 3 (資料:福島県統計課「福島県景気動向指数」より作成。)

10 その他

(1) 福島県年次経済報告書 判断の推移

発行年次 対象年次	総合判断	個人消費	建設需要	生産活動
2016年 2015年	平成27年(2015年)の福島県経済は、海外経済の減速の影響や前年から続く消費税率引き上げによる落ち込みから弱い動きが一部にみられたものの、全体としては、東日本大震災からの復興需要に支えられ、持ち直しの動きが続いた。	一部に弱い動きがみられたが、総じて堅調に推移した。	民間需要は前年を上回った。公共工事は前年を下回ったものの高水準で推移した。	海外経済の減速の影響や前年から続く消費税率引き上げによる落ち込みから、弱い動きとなった。
2017年 2016年	平成28年(2016年)の福島県経済は、生産活動において弱い動きがみられたものの、東日本大震災からの復興需要を背景に建設需要や雇用・労働が堅調に推移し、全体としては持ち直しの動きが続いた。	一部に弱い動きがみられたが、総じて堅調に推移した。	新設住宅着工戸数及び公共工事は前年を上回り、業務用建築物着工棟数は前年を下回った。	弱い動きが続いた。
2018年 2017年	平成29年(2017年)の福島県経済は、建設需要において減少傾向がみられるものの依然として高い水準にあり、生産活動は横ばいながらも緩やかな持ち直しの動きとなっているなど、全体としては堅調な動きが続いた。	一部に堅調な動きがみられたものの、総じて弱い状態が続いた。	復旧・復興工事など復興需要のピークが過ぎ、高水準ながらも減少に転じた。	緩やかな持ち直しの動きが続いた。
2019年 2018年	平成30年(2018年)の福島県経済は、建設需要において減少傾向がみられたものの依然として高い水準にあるほか、雇用・労働などが堅調に推移するなど、全体としては緩やかな持ち直しの動きが続いた。	総じて堅調な動きが続いたものの、一部に弱い動きがみられた。	復興需要は高水準が続きながらもピークが過ぎ、新築住宅着工戸数は、減少が続いた。公共工事及び業務用建築物着工工事は、持ち直しの動きがみられた。	一進一退の状況が続いた。
2020年 2019年	令和元(平成31年)(2019年)の福島県経済は、建設需要において減少傾向がみられたものの雇用・労働が堅調に推移するなど、全体としては緩やかな持ち直しの動きが続いた。	総じて堅調な動きが続いたものの、一部に弱い動きがみられた。	復興需要は高水準が続いたもののピークが過ぎ、新築住宅着工戸数及び業務用建築物着工工事は減少が続いた。公共工事は持ち直しの動きがみられた。	弱い動きがみられた。
2021年 2020年	令和2年(2020年)の福島県経済は、建設需要や金融情勢が堅調に推移したものの、新型コロナウイルス感染症の影響により個人消費や生産、雇用・労働が悪化し、全体としては厳しい状況が続いた。	新型コロナウイルス感染症の影響により悪化した。	東日本大震災の復興需要及び令和元年東日本台風の復旧需要を背景として高水準にあるものの、民間の建設需要に一部弱い動きがみられた。	新型コロナウイルス感染症の影響により悪化した。
2022年 2021年	令和3年(2021年)の福島県経済は、一部に持ち直しの動きが見られたものの、新型コロナウイルス感染症の影響などにより全体としては厳しい状況が続いた。	新型コロナウイルス感染症の影響により、厳しい状況が続いた。	東日本大震災の復興事業の進捗などにより、民間需要、公共工事ともに弱い動きとなった。	持ち直しの動きが見られたが、新型コロナウイルス感染症の影響などもあり、一進一退の状況が続いた。
2023年 2022年	令和4年(2022年)の福島県経済は、新型コロナウイルス感染症の影響が残るものの、全体としては緩やかな持ち直しの動きがみられた。	一部に弱い動きがみられるものの、緩やかな持ち直しの動きがみられた。	公共工事は復興事業の進捗により弱い動きが続いたものの、民間需要の一部には持ち直しの動きがみられた。	緩やかな持ち直しの動きがみられた。
2024年 2023年	令和5年(2023年)の福島県経済は、先行きに不透明感がみられたものの、全体としては緩やかな持ち直しの動きが続いた。	緩やかな持ち直しの動きがみられた。	公共工事は復興事業の進捗により弱い動きが続いたものの、民間需要の一部には持ち直しの動きがみられた。	緩やかな持ち直しの動きが続いた。

雇用・労働	物価	企業	金融	市場	景気動向指数
→ 地域や業種にばらつきがあるものの、改善の動きが続いた。	→ 国内企業物価指数は前年を下回り、消費者物価指数は前年を上回った。	→ 企業倒産は低水準ながらも件数、負債総額ともに前年を上回った。預金残高、貸出残高はともに前年を上回り、金利は低下した。		株値は上昇し、円相場は円安が進んだ。	→ 生産活動の弱い動きなどを反映し、下降基調が続いた。
→ 一部に弱い動きがみられるものの、改善の動きが続いた。	→ 企業物価指数、消費者物価指数はともに前年を下回った。	→ 企業倒産は低水準ながらも件数、負債総額ともに前年を上回った。預金残高、貸出残高はともに前年を上回り、貸出金利は低下した。		株値は下落し、円相場は円高となった。	→ 生産活動の弱い動きなどを反映し、下降基調が続いた。
→ 求人倍率は、改善の動きが続いたものの、総じて弱い動きがみられた。	→ 企業物価指数、消費者物価指数はともに上昇した。	→ 企業倒産は、低水準ながらも大型倒産が発生し、増加傾向がみられた。金融機関預貸残高は、預金残高は一進一退の状況が続いたものの、貸出残高は高止まりの動きがみられ、貸出金利は上昇した。		株値は上昇し、円相場は円安となった。	→ 回復基調がみられたものの、下降した。
→ 雇用は改善が続いた。労働は緩やかな回復傾向がみられた。	→ 企業物価指数、消費者物価指数はともに上昇した。	→ 企業倒産は、増加傾向が続いた。金融機関預貸残高は、預金残高が減少傾向が続いたものの、貸出残高は高止まりの動きがみられ、貸出金利は下降した。		株値は上昇し、円相場は円高となった。	→ おおむね横ばいで推移した。
→ 雇用は依然として高水準で推移した。労働は緩やかな回復傾向がみられた。	→ 企業物価指数、消費者物価指数はともに上昇した。	→ 企業倒産は、減少に転じた。金融機関預貸残高は、預金残高が増加に転じ、貸出残高は高止まりの動きがみられ、貸出金利は下降した。		株値は下降し、円相場は円高となった。	→ 下降基調で推移した。
→ 新型コロナウイルス感染症の影響により悪化した。	→ 企業物価指数は下降し、消費者物価指数は上昇した。	→ 新型コロナウイルス感染症に対する公的支援策などにより倒産件数及び負債総額は前年を下回った。預金残高及び貸出残高は前年を上回った。		株値は上昇し、円相場は円高となった。	→ 新型コロナウイルス感染症の影響により全体として下降した。
→ 厳しい状況が続いたが、緩やかな改善が見られた。	→ 企業物価指数は上昇し、消費者物価指数は下降した。	→ 企業倒産の件数は前年を下回ったが、負債総額は前年を上回った。預金残高及び貸出残高は前年を上回った。		株値は上昇し、円相場は円安となった。	→ 新型コロナウイルス感染症の影響で下降した前年から、持ち直しの動きが見られた。
→ 緩やかな改善がみられた。	→ 企業物価指数及び消費者物価指数はともに上昇した。	→ 企業倒産の件数及び負債総額はともに前年を上回った。預金残高は前年を下回り、貸出残高は前年を上回った。		株値は下降し、円相場は円安となった。	→ 上昇基調で推移した。
→ 一部に弱い動きがみられた。	→ 企業物価指数及び消費者物価指数はともに上昇した。	→ 企業倒産の件数及び負債総額はともに前年を上回った。預金残高及び貸出残高はともに前年を上回った。		株値は上昇し、円相場は円安となった。	→ 下降基調で推移した。

(2) 令和5年各機関の景況判断

ここではそれぞれの「公表月」で整理しており、機関によって、用いる指標の採用月や景況判断の対象としている月について相異がある。

機関名	内閣府		東北経済産業局		日本銀行福島支店		福島県	
	「月例経済報告」		「管内(東北6県)の経済動向」		「福島県金融経済概況」		最近の県経済動向	
	判断	コメント	判断	コメント	判断	コメント	判断	コメント
R5.1	→	景気は、緩やかに持ち直している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつも、半導体不足の影響が和らいでおり、緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.2	→	景気は、このところ一部に弱さがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、新型コロナウイルス感染症の影響が和らぐ中、半導体不足の影響も和らいでおり、緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.3	→	景気は、このところ一部に弱さがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	緩やかに持ち直している	↓	県内景気は、生産面の一部に弱めの動きがみられるものの、新型コロナウイルス感染症の影響が和らいでおり、基調としては緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.4	→	景気は、一部に弱さがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、生産面の一部に弱めの動きがみられるものの、新型コロナウイルス感染症の影響が和らいでおり、基調としては緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.5	→	景気は、一部に弱さがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、生産面の一部に弱めの動きがみられるものの、新型コロナウイルス感染症の影響が和らいでおり、基調としては緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.6	↑	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、生産面の一部に弱めの動きがみられるものの、新型コロナウイルス感染症の影響が和らいでおり、基調としては緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.7	→	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	↑	県内景気は、一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.8	→	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している		—	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.9	→	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、一部に弱めの動きがみられるものの、緩やかに持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.10	→	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	↑	県内景気は、一部に弱めの動きがみられるものの、着実に持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.11	→	景気は、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、一部に弱めの動きがみられるものの、着実に持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。
R5.12	↓	景気は、このところ一部に足踏みもみられるが、緩やかに回復している。	→	緩やかに持ち直している	→	県内景気は、一部に弱めの動きがみられるものの、着実に持ち直している。	→	県内の景気は、先行きに不透明感がみられるものの、緩やかに持ち直している。